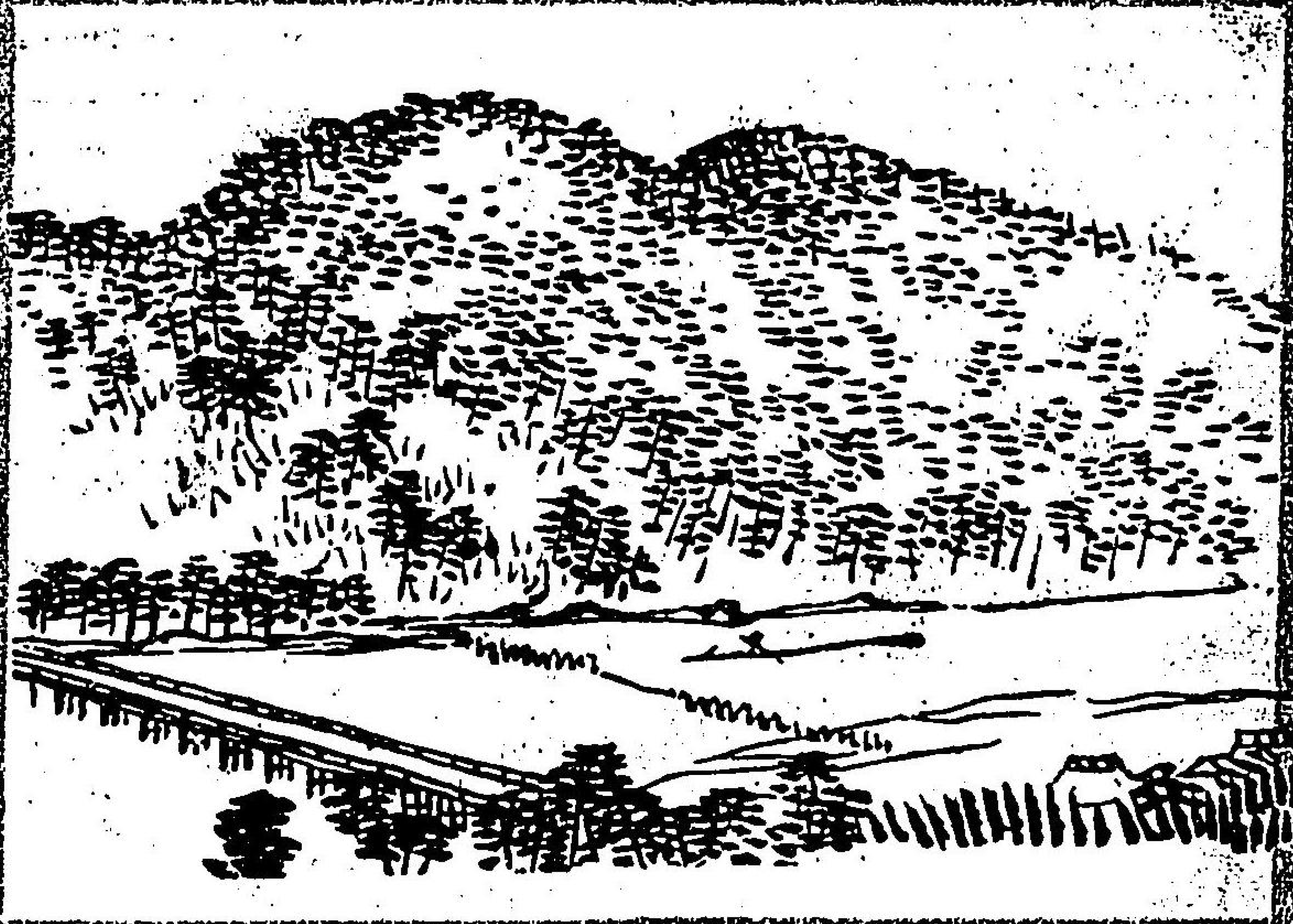
セメ 491

191
324

嵯峨名所案内圖會



明治三十年四月七日印刷
明治三十年四月十一日發行
全
著者兼發行者　京都府葛野郡嵯峨村字上嵯峨百三十四番戶　小林吉明
印刷者　京都市上京區烏丸通三條上ル場之町三十三番戶　山鹿福三郎

特29
480

嵯峨名勝案內圖會

嵯峨　雙湖巷桂陰

序說

豆うゝる畑も木部屋も名所かなとは、よくもいへりけり。嵯峨天皇、此里に離宮を營ませ給ひてより、千有餘年の久しき、王侯將相のわび住める事たえ間なく、九重の都との往來、常にしげかりければ、いつとはなしに、嵯峨も名所舊跡てふもの〻、淵叢とは成れり。

抑々我嵯峨の地たる、京都を距ること僅に一里あまり、地勢西北に蜿々たる山丘を負ひ、東南は廣濶たる平野にひらく。愛宕の高

嶺巍峨として、洛中の諸山を睥睨し。大堰の長流清徹として、俗腸を洗ふ。小倉、龜山の閑寂。清瀧、月輪の幽邃。庭湖、廣澤の靜望。いつれか塵寰の外ならざるべき。されば古來申すもかしこき邊より、やむことなき公達、あるはたけき武士のやからまで、志を得れハ即ち曰、我れ嵯峨に遊ハむ。志を得ざれば即曰、我れ嵯峨に隠れむと。嵯峨天皇を始め奉り、後嵯峨、龜山、後宇多、後龜山のみかど相つき、此に仙居を搆へさせ給ひしのみならで、代々のみかどの　御幸たえさせられず。殊に後宇多法皇ハ四歳あまり、萬機をこゝにしろしめし。南北両朝の御講和も、亦實に此に成れり。定家、爲家こゝに住み、寂蓮、西行こゝにかくれ、正行、義貞此に忠骨を埋め、小督、祇王こゝに綾羅を拋ち、長嘯、去來此に雅懷を遣る。吉田了意も此に鐵槌を留め、津崎村岡はこゝに餘生を樂む。更に眼を轉して、佛徒緇流を見れば、弘法、寛朝、圓光、奝然、夢窓、隠元等の高僧大德、前後相繼でこゝに靈跡を垂る。曰く何、曰く何、斯くの如くして愛宕、野々宮を出で來にけり。大覺、天龍、二尊、清凉の諸刹は出で來にけり。斯くの如くして嵐峽、庭湖の花は匂ひ出でぬ。堰水、廣澤の月は照り出でぬ。斯くの如くして愛宕の雪は深く、小倉の時雨は寒し。天象地物一として歴史の遺形ならざるなく、美術の斷片ならざるなし。松の聲、竹のひゞき、何れか詩歌のしらべならざらむ。山の陰、河の涯いづれにか古人の音容に接せざらむ。寔に此れ天下の仙境、世界の樂土といひつべし。

さしもいみじき名所なれど、浮世のさがはせむ方なくて、代をふるまゝにあれに荒れ行き、あるは草むらに埋もれ、竹の林におほハ

る丶など、此地に遊ぶ人をして

殘雨荒亭物外求　嵯峨陳迹正悠々　琴聲何在柴門夕
草色猶悲野逕秋　無復小倉迎鳳駕　空臨大堰想龍舟
漢家一自離宮廢　多少禪林領古邱

の嘆を發せしむるに至れり。

されど今は鐵路もひらけ、遠近より遊び來むみやび男達も日に月にいやまさりぬべく、從ひてかくあれ果てたる所々もむかしにかへり、今の王公將相も、古人の高躅を尋ね出して、おのがじ丶閑邸幽居を搆へぬべき、氣運も見えけるこそ悦ばしけれ。あそれ皆來よ此里に、あはれ皆探れこの名跡を。

嵯峨に遊はむ人は、京都より汽車にて嵯峨停車場に着き、之より西南の道をとりて行く事四町、天龍寺門前に出で南に折れて、長辻の松の木陰を蹈むこと二町斗、やがて渡月橋頭に達すれは、嵐峽の山色、大堰の水光、忽ち眼前に現はれぬべし。

嵐山

春は花のしら雲たなびき、夏は若葉の緑したゝり、秋は紅葉のにしきをりいで、冬は雪のしろ妙まばゆく、四時共に風光他所またぐひなきは、皆人の知る處也。　龜山法皇御仙居（今の天龍寺の地）の時、吉野山より數百株の櫻樹を移し植させ給ひ、

　春毎におもひやられし三芳野の花ハけふこそ宿にさきけれ

と、御製遊はされしよりこの方、此絶勝をなせしなれは、誠に法

皇の　御聖靈、此山よこしらせ給ふと、申し奉るも不可なけむ。宜なる哉、古來如何なる畫工の妙手を以てするも、此眞景をうつし得ずして筆を捨つるや、加之のみならず、

大堰川

の清流其麓をひたし、渡月の長橋波底にうつる處、更に一段の景趣を添ふ。三船の御遊は久しく絶ゆれど、松の音、水のひゞきは今猶むかしをしらぶめり。此川のながめ、春秋は更にもいはず、頃しも五月の暗夜をすだく螢は花と亂れ、夏の夜の氷輪、橋下に落ちて千々にくだくるの凉味は、かの紅塵萬丈の　加茂の川原にまさりぬべきは、從來人々の多くしらざる處、唯、六如道人能く此景を捕へたり。

月黑微風鳴岸蘆　貪凉橋上立斯須　流螢誤撲人衣墜
驀地高飛不受呼

渡月橋を渡りて、行く事一町斗り、

法輪寺

に達す、智福山と號する眞言宗の古刹にして、堂宇はいにし元治甲子の兵火に罹りて失せたれど、本尊虚空藏菩薩の尊像は、道昌大僧都の刻める靈佛にしあれば、禮拜者常にたえず。例年四月十三日の十三參りと稱するものは、最も有名なる法會にして、兒童の詣づるもの、實に數十萬を以て數ふ。

子供みよさくら散れ月も十三夜　　嘯山

此門前の街道を南に進めば、西行櫻の舊跡、松尾の大社、西方寺、梅の宮、桂の離宮等へ達しぬべし。

是より嵐山の麓を廻り、俊成卿が

となせより流すにしきは大ゐ川筏につめる木葉なりけり

てふ、戸無瀬の瀧を見ながら、奥に進むこと四五町計、はせを翁が句の、花の山二町登れハ大悲閣を刻める立石あり。但し此迄には處々岩のがけ路もあれば、心して歩まねは、蹈みはづしぬべし。やがて二町登れは、

大悲閣千光寺

なり。是れ保津、天龍、大井諸大川の疏鑿者、古來稀有の大企業家たる、角倉了意翁の菩提所にして、翁が法体にて石割斧を杖き、巖上に踞するの木像を安置せり。翁、本姓吉田、諱を光好、近江佐々木氏の庶流なり。始終身を以て水利に任じ、國家に實益を遺せる事擧て数ふべからず。保津川は實に慶長年間、開鑿の功を成せしものなり。當時未だ精巧の機器あるにあらず、殆むど徒手を以てこの偉業を果す、今の所謂工學者、事業家にして朝に成し夕に破るゝが如き工事をなせるもの、翁に耻る無き耶。

翁の碑は堂の前に在り、林道春の選文なり。此處遠く京洛を見渡し、眺望甚だ可なり。因に

大堰川上流の諸名勝

を畧叙せむよ、保津川の下流大堰川の上流は、實に天下無類の景ともいふべく、凡そ三里の溪間、千仞の岩壁を破て奔流する勢ひは、實に魂飛び肉踊る乃慨あるそ、内外人のよく知れる處なり。遊はむ人先づ舟を一の堰の上に倚ふて清流を溯り、戸無瀬の瀧、扇岩、

千鳥が淵を過ぎ、仰ては嵐光に感じ、俯しては魚鼈を數へ、やがて棹を松花園にとゞめて、一煎の茶を喫するも可ならむ。樫木が淵、牛岩を經て大悲閣に登り、了翁が偉業を慕ふも亦可なり、夫より流漸く急く、舟行いよ〳〵遲く、綱引かされは遡る能はす、數町にして屹立せる大巖あり、赤岩と稱す。花の湯てふ礦泉其上に在り、一浴せは心身おのづから爽かなるべし。是より流俄に急激となり、飛沫舟中を侵す、之を大瀬と稱す、內直が

小舟さす流え矢より早くしてみ棹は弓となりにける哉

とはよくもいへり。二三町にして蓮華岩あり。蓮華に似たる奇石点々、湍中に浮沈せり。右の方千丈の岩壁え、恰も削り立たるが如く、山猿さへも越えかぬる所、之を猿飛と稱す。やがて溪間稍廣く、流水渦卷くを見る、此れ卽保津川と淸瀧川と落合ふ所よして出合と名附く。群書を堆積せるが如き岩壁、高さ數十丈、老松其上に橫はり、碧潭其下を洗ふ、之を書物岩と稱す、巖角に飛橋を架す、出合橋といふ。漢土の赤壁我之を知らすと雖も、恐くは景光之にハ過ぎささらむ。

かくしおく誰が世の書のあとならむ姿を山のた、むいはほに　惺窩

是より奧に鵜河、屛風岩、曲り淵、烏帽子岩等さま〴〵の名勝あれと、今ハ畧しぬ。唯、此間の奇觀妙景皆川淇園よく歌へり。

始閲嵐峡勝　物色天下奇　入峡水屈曲　絶壁擁両涯
雲木相參錯　薜蘿萬古垂　舟路多幽暗　亭午日纔窺
迎送翠飛動　行行山愈敧　頽巖與崩石　都皆含異姿
近看尤可怖　數仞使狂獅　兕走象又踣　其餘類鹿麋
両虎中流起　爭牛勢參差　潜怪亦數十　群然導伏螭
就中灘六七　險絶令人嘻　迅湍似電掣　両耳坐生頤

水性元柔弱　突兀怒崄巇　般般萬雷吼　碎破碧瑠璃
忽堆滿川雪　衝折復迤迤　長篙失一撑　誤觸成碎糜
柁工戛辛苦　櫓人眼不移　両岸靑黄走　百里一瞬馳
歸與非不快　毎處生慄危　追憶援毫寫　心遠情如錐

又是等の岩間には、新暦六月の頃、杜鵑花もゆるか如き色にさき、清潭を染むる所、えもいはれぬ風情あれは、舟遊第一の好季とす。

是より渡月橋畔に歸りて、

小督局の墓

を弔せむか。墓は三軒家の半町東、藪の中にあり。十五夜の月空しくすみて、仲國の笛の音も、局か琴のしらへも、峯のあらしと松風にのみ殘れるハ、物のあはれの限りなりけり。

　ふきふしや竹の子となる人の果　　はせを

三軒家、洗心亭、三秀院、對嵐山房（東本願寺別荘）軒を連ねて、何れも嵐光水色を領せすといふ事なく、遊ふもの歸るを忘れすといふことなし。

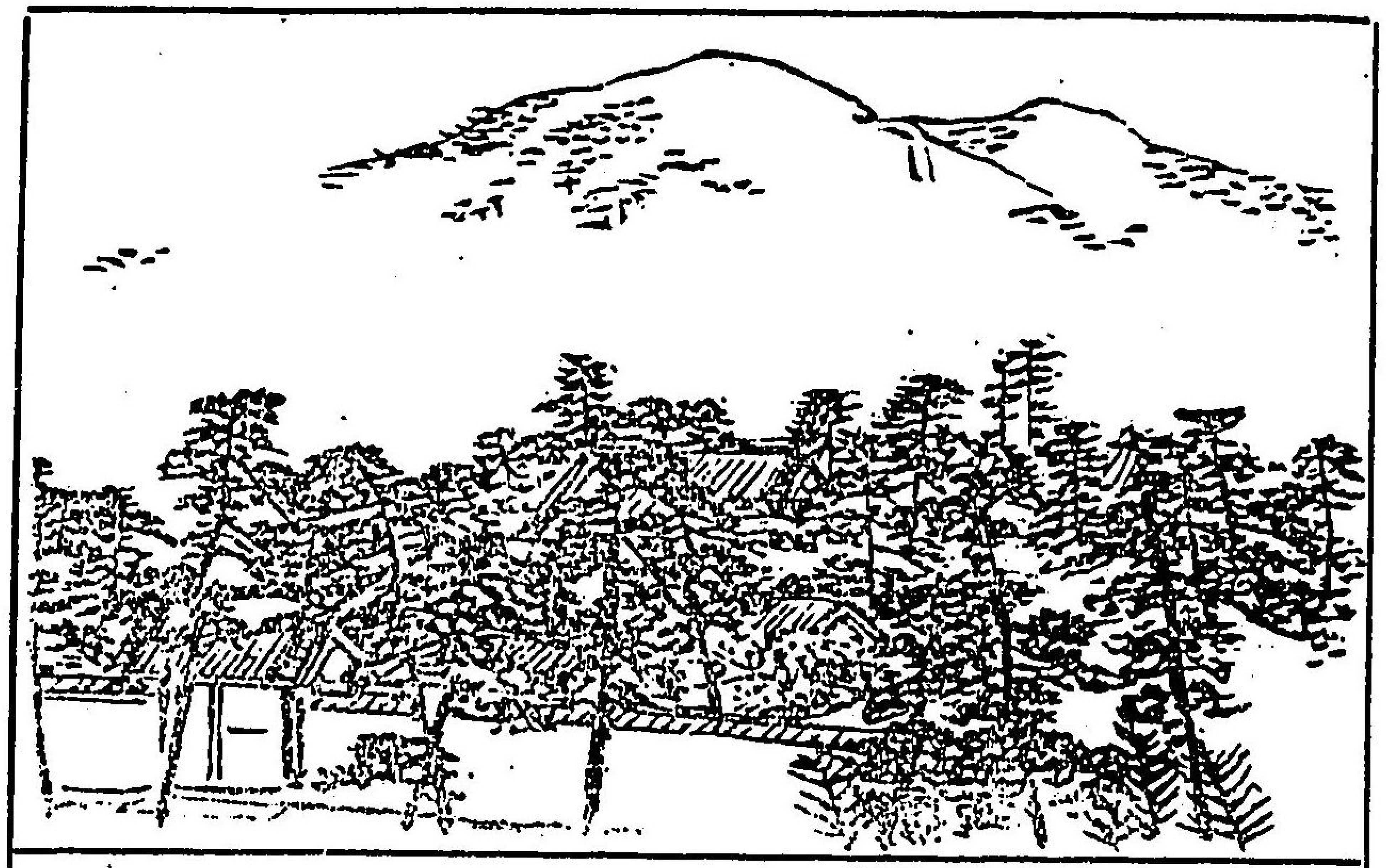
再び渡月橋畔にかへり、琴聞橋を渡り、臨川寺馬塲に松子を拾ひ、夢窓國師入定の靈地たる、臨川寺を訪ひて、世良親王か川端殿のむかしを忍ふも可なり。次に梅龍か

七帝師堂龜嶺陰　懸泉寶塔掛雙林　井荒猶冷中書水
賦就難安王子心　雲擁天陵結龍影　風廻松洞湧簫音
皇宮一自花宮變　幽草常埋輦路深

を吟したる、

天龍禪寺

に至る。寺ハ靈龜山と號し、臨濟宗五山の第一なり。暦應年間　後



TENRYUJII　天龍寺

醍醐天皇御追福の爲めに、足利尊氏の創建せし所にて、むかしは七堂伽藍皆備はり、塔頭亦數十院の多きに及び輪奐の美、地域の大洛西に冠たりしも、數回の回祿によりて大抵失せたるぞ口惜しき。されど此頃四方の義財を集めて再建中なれば、やがてむかしの樣を見るを得む。境内には　龜山後嵯峨の諸帝陵苔むして、人をして徘徊顧望去る能はざらしむ。又林泉は開山夢窓國師の作る處にして、幽邃清雅洛中多く其比を見ず。嗚呼足利氏の罪惡天人の共に怒る所也と雖も、其悔非遷善の業、亦甚だ勉めたりと謂つべし

　松杉をゆふへのあらしふき立て、底に沈る入相のかね　涌蓮

然り、鳴鐘殷々として松嵐に和し、庭潭雲散じて夕陽落つる處、道心を動し禪骨を衝く、其れ幾何ぞ

更に北して一町はかり竹籟颯々の中に、

野々宮

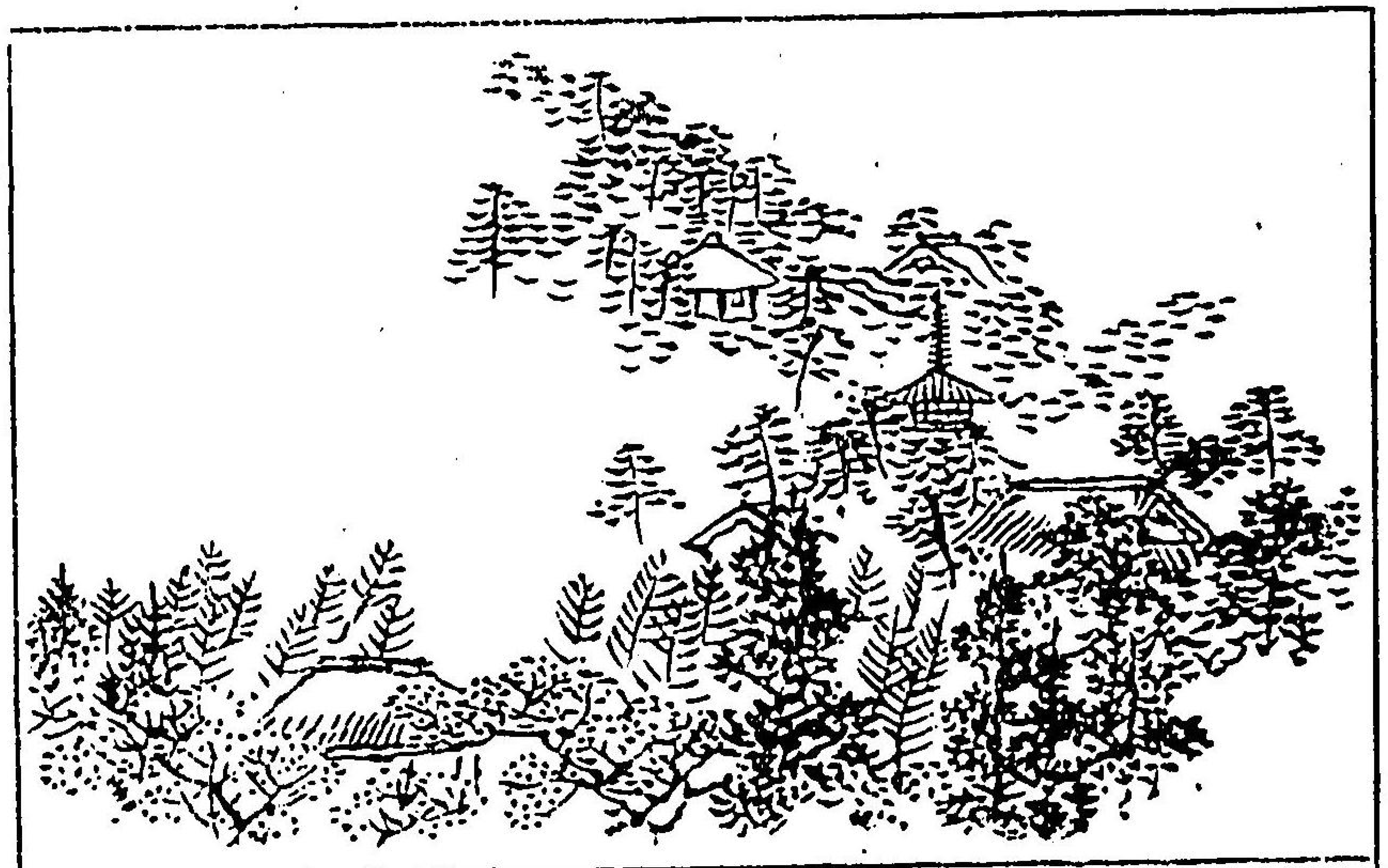
あり、齋宮の舊跡にして、所謂黒木の鳥居、小柴垣　簡古の狀掬すへし。齋宮の事垂仁天皇の御代に始り、後鳥羽院の朝に絶えたり。琴の音はいづれのをよりもしらへねど、峰の松風は今も通ふぞあり。藪をくゞりぬけて、西には幾千代ふるき龜山、時雨をさそふ小倉山相連り、前中書王兼明親王が兎裘の賦を作りて、隱れ給ひし所、今ハ定かならねど、此あたりならむかし。野路を辿る事三四町

常寂光寺

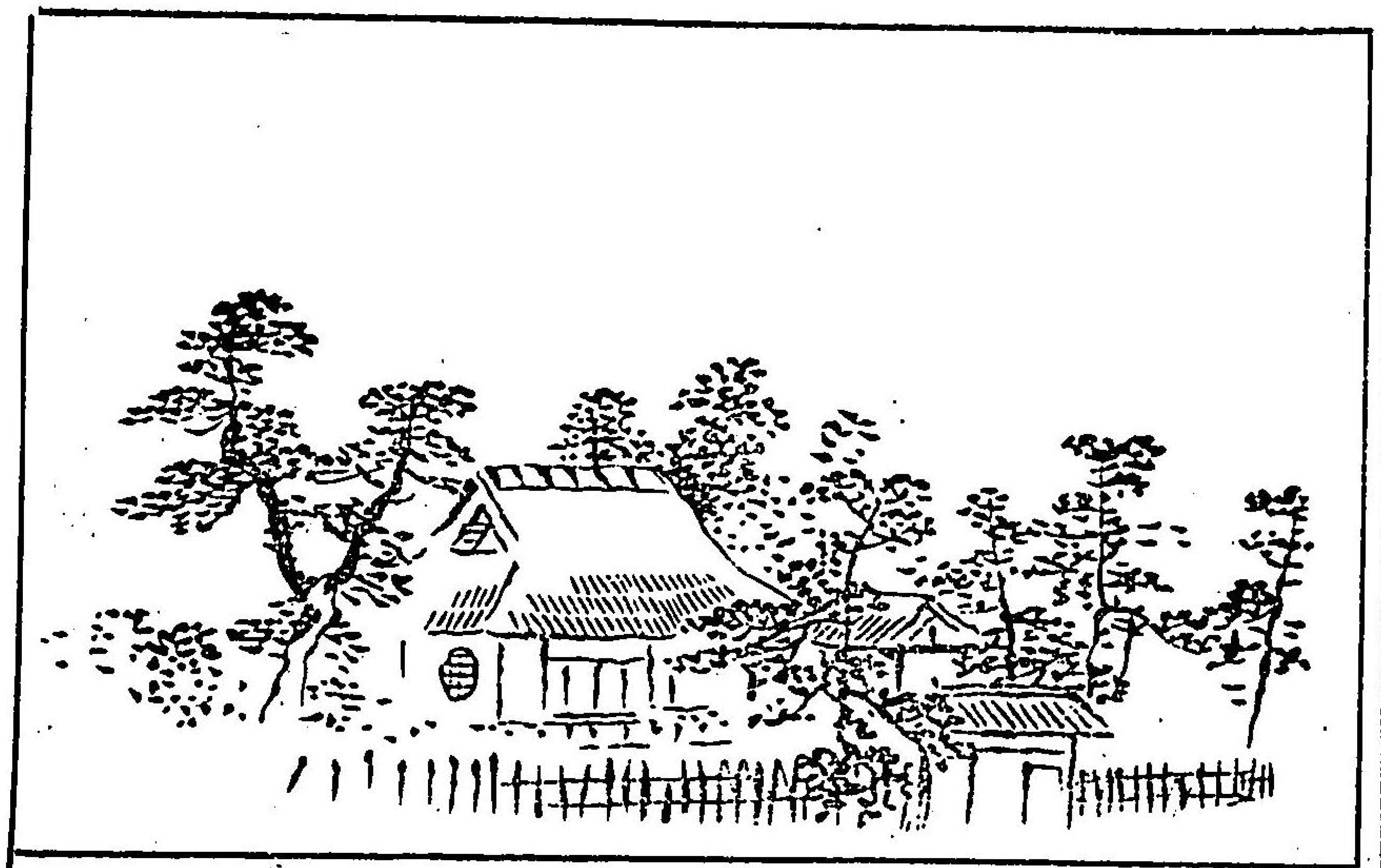
あり。山の半腹に位して最も幽閑の仙境たるのみならず、東方濶然として開け眺望佳絶なり。をりにハ妻とふ鹿の聲もきこえて、定家卿が

小倉山秋のあはれや殘らまし
小鹿の妻のつれなからずは

とは此わたりなるべし。寺は寛永年間本國寺十六世日禎上人の開基せしものにて、定家卿の歌仙祠



常　寂　光　寺　JŌJAKUKŌJI



落　柿　舍　RAKUSHISHA

は其上にあり。石階を下りて東北一町の所には、俳哲去來が住庵たりし

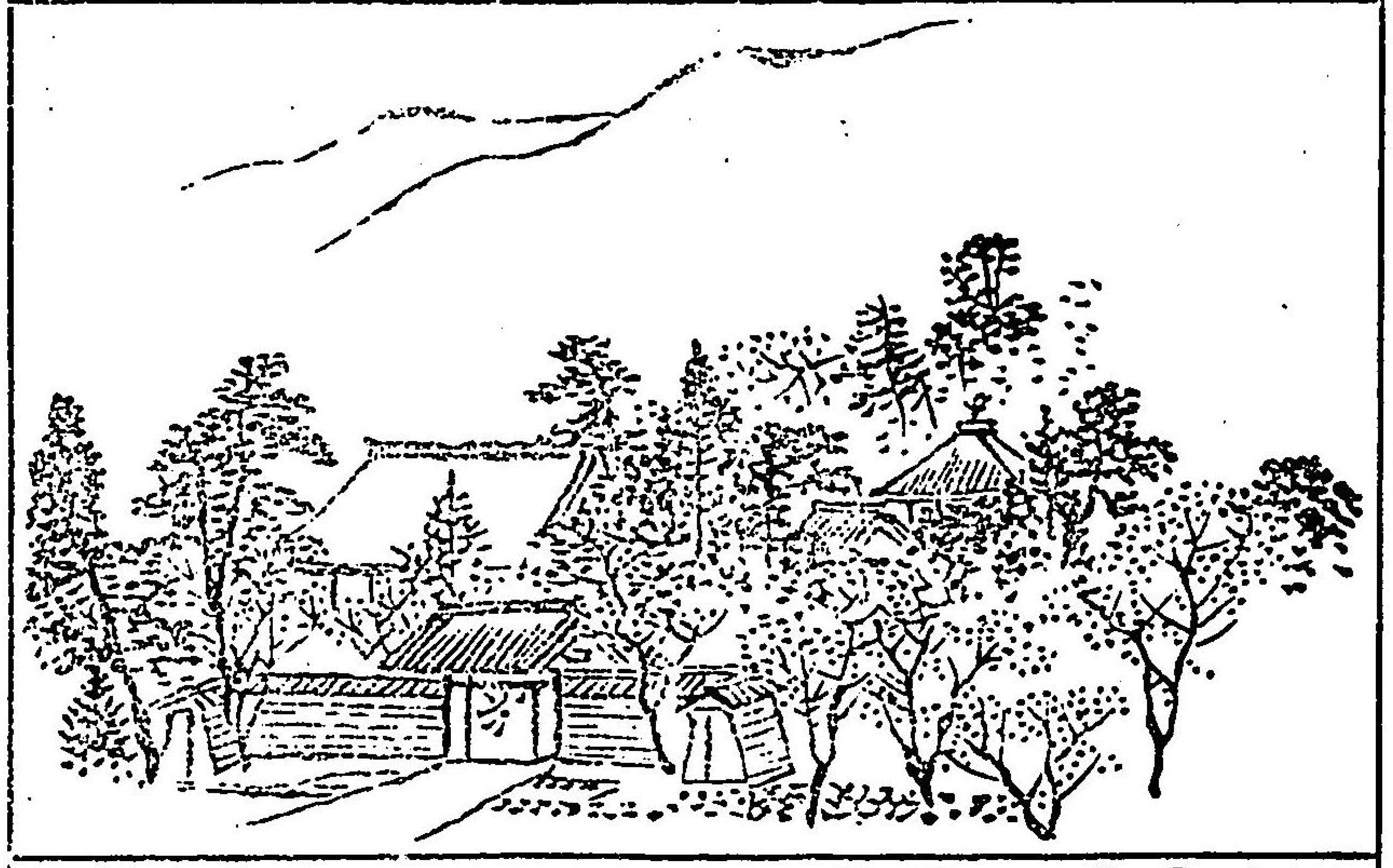
落柿舍

あり。今は柿の木も少くなりにければころ〳〵と屋根もる音、ひし〳〵と庭につふるゝ聲ハきかねど、梢ま近きあらし山を見渡しても先哲のあとを慕ひ、大竹藪をもる月夜には、何やらゆかしき聲もすなり。去來翁の墓は菴後の藪中

にあり。涌蓮と其所を同ふす。一片の小石よ唯だ去來の二字を刻せるのみ、あはれかくてこそ去來なりけれ。寂蓮西行の庵跡もこのあたりなるへけれと今は定かにわかず更に數歩を進むれば、

小倉山二尊院

に到りぬべし。當院は　嵯峨天皇の勅願により、彌陀釋迦の二尊像を安置せられたる靈場にして、法然、湛空両上人の中興也。かの



小倉山二尊院　NISON-IN

有名なる法然上人足引の御影は宅磨法眼の筆にして實に此寺に傳はれり。院後の山腹には二條、三條、鷹司の諸名族を始め、伊藤仁齋、東涯さてハ吉田了以等の廟墓苔むして、人の腸を斷ち、院前には老樹の紅葉、幾よの霜を重ねて、あたりまばゆき迄に照り、今ひと度の御幸を待てるあり。位置の恰好、境地の幽閑地方第一と稱へつべし。又定家卿の時雨亭は、院後の山上一町の所に在りて、登臨の景頗る佳なり。卿が小くら山しくるゝ頃の朝な〳〵、きのふも薄き四方のもみち葉とは、このあたりをいへるなるへし。二尊院の一町北の山邊には、

往生院祇王寺

の舊跡あり。寺は已に失せたれと、今再建中なり。青々と苔の衣を

きたる、二基の五輪塔を見ればやがて涙はこぼるめり

　もえいつるもかゝるもおなし野への草いつれか秋にあはてはつへき

とは、これ妙齢の祇王が、大悟徹底したる鐵案にして、たけき武士にもまさりぬへき心ばへなりけり。祇王は江州野洲郡江邊の庄の産、父の名は九郎時定、代々庄司たり、後、身をおとし白拍子となり、平相國清盛の寵を受く。或時祇王清盛に請ふて、おのが郷里に水利を起し、慶を後昆に垂る、あはれこの一事にても世代常の女流が夢にだもおもひ及ぶ處ならむや。やがて相國寵を佛御前に換へければ、祇王は決然錦綾を抛て、身に墨染の淨衣をまとひ此地に隱る。佛御前も亦其あとを慕ひて來り、共に後生を祈りけるとぞ。

祇王、妓女、母刀自、並に佛御前の木像は今大覺寺にあり。祇王寺再建成らば之に移さむとす。其南に接して

新田義貞公の首塚

あり。近き頃まで新田十三社と稱し、一小祠ありしも廢絶しければ、こたび北垣國道、谷鐵臣の諸氏相謀り、一の紀念碑を建て、之を不朽にせられたり。勾當內侍、公の首を三條河原に獲て此に葬りしとなむ。又其上に

瀧口寺

の跡あり。瀧口入道が遁世の所にして、横笛が慕ひ來り、

　山ふかミおもひ入りぬる柴の戸のまことの道に我を導け

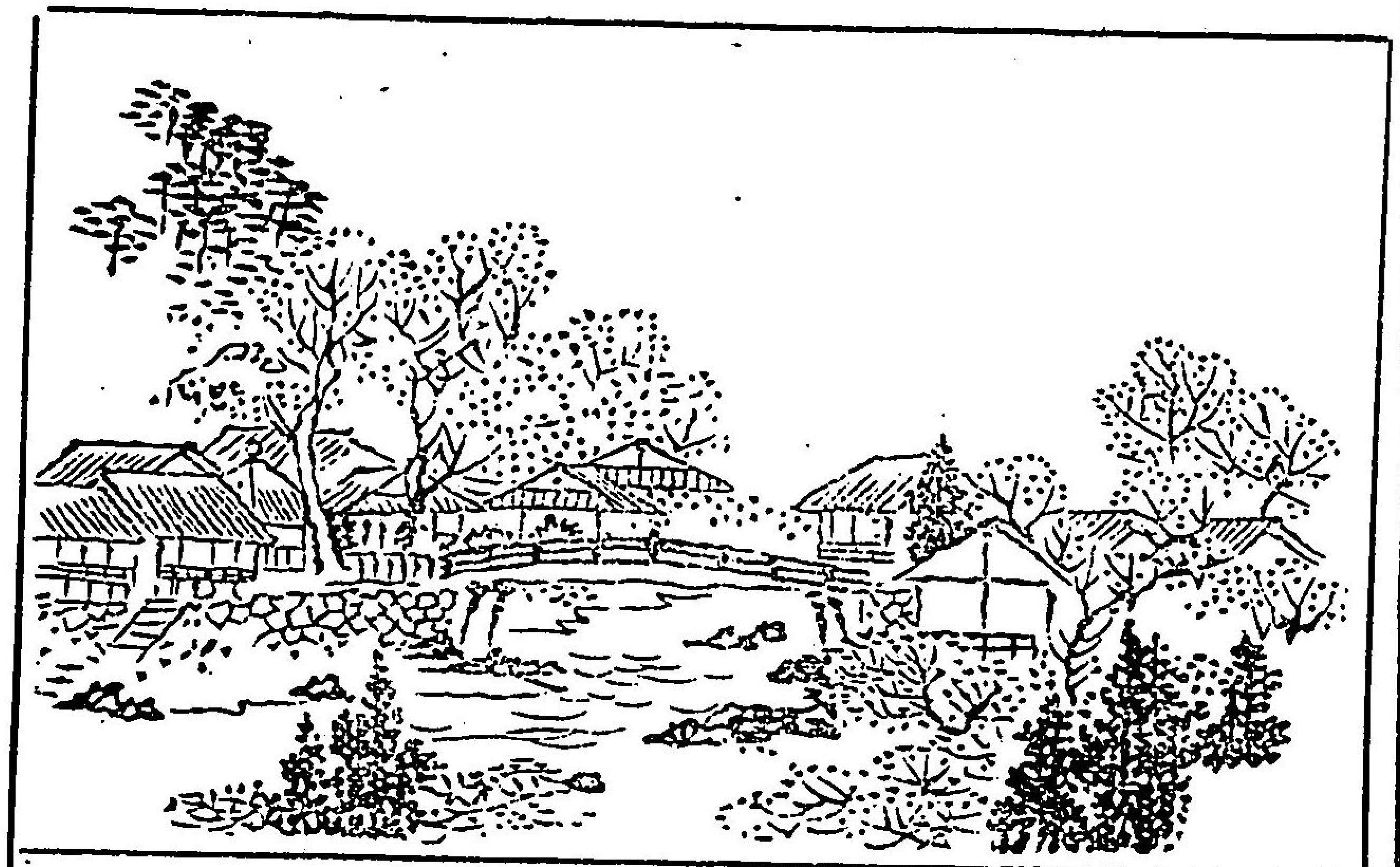
とかいつけたる石は、歌石と稱して今猶あり。是より愛宕街道を北に進むこと二三町、後龜山天皇福田寺の陵を伏し拜み更に二三

町にして

化野念佛寺

と稱する古寺あり。華西山と號す。兼好法師か徒然草にかけるは此處なめり。むかしえ洛東の鳥部山と併ひ稱して、洛西の荼毘所なりしも、今ハいたつらに、萩すゝきの露けきを見るのみ。この向ひの山は万燈籠山とて、かの八月十六日の夜、大鳥居を点火する所なり。尚進むこと二町許り、一華表に達す。愛宕登山第一の關門にして、此より山上まて五十町とす。之をくゞりて試みの阪といふにかゝる。上下十二町

清瀧



THE VILLAGE KIYOTAKI 清瀧

に出つ岩間にむせふ激流は、清凉の聲をたゝす。高欄擬寶珠の橋あり、渡猿橋と稱す。両岸の竹樹みとり深く炎陽早く山後にかくれ、午下忽ち凉氣動く。石鷄の聲を潺湲乃響に和し、銀鱗閃々として漣灩とまかふ。這裡の景趣を領して茶亭に午睡を貪る、従來人の多く知らさるの妙味あり。

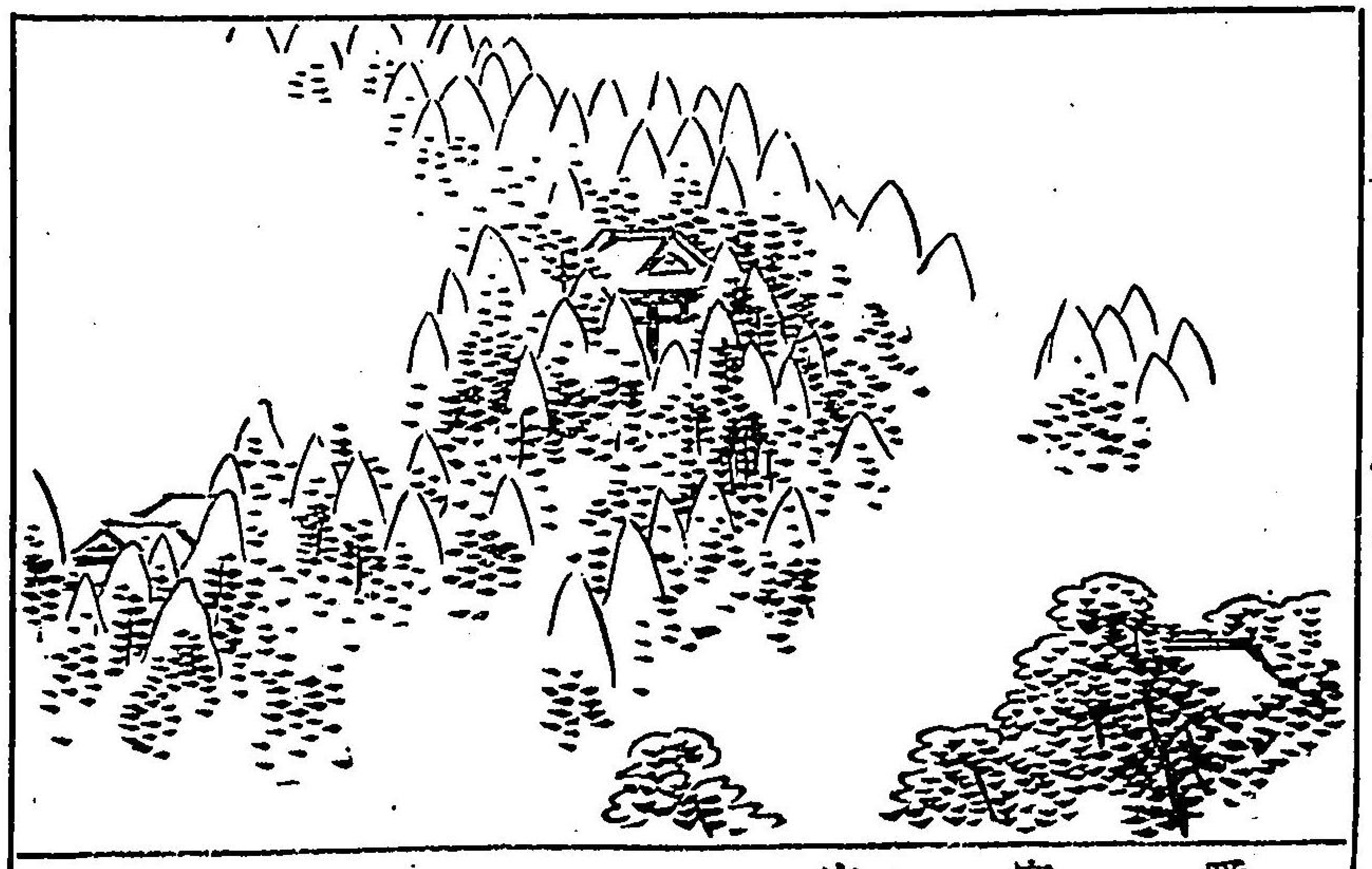
岩かねに天くたりける清瀧は　いつれの神の　あかれ成らむ　隆辨

清瀧の水くみよせてところてむ　はせを

是より上、三十八町の峻阪を攀れは、再ひ萬斛の汗をしほらざるへからず。一歩又一歩幾回となく茶亭に憩ひて登るも、猶氣息奄々として、遂に山巓の

愛宕神社

に達すへし。本社、伊弉冊命外四柱を奉祀す。天慶元年藤井慶俊勅を受て社殿を建つ。蓋し是より先大寶年中、役の行者始めて之を開き旭の峰白雲寺と號し、慶俊は實



ATAGOYAMA　愛宕山

に其中興なり。むかしは山上五坊もありて「教寺連レ雲絶二纖埃一」なとの句も殘れと、今は純然たる神社となれり。山中は老杉鬱茂して、常に雲霧を蒸生し、まことに洛中第一の靈地なり。又火災の守護神として、火産の神靈を合祀せらる。嚴冬積雪、脛を沒するの日と雖も、參拜者を絶ざるは宜なりけり。

あきらけき朝日のかけに愛宕山雪も氷もとけそくたくる　定家

天正十年五月、明智光秀此山上に於て連歌せり。時に光秀叛志あり、「ときは今天か下しる五月かな」を打出したりしに、行祐とりあへず「水上まさる庭の夏山」と付けて、光秀の心底を暴露し、紹巴は「花おつる池のなかれをせきとめて」を第三して、光秀の頂門に鐵槌を下したり。いとも興ある事ならずや。

樒が原ハ裏阪に沿ふたるあたりなるへけれと定かにそれとしら雪

の積りて花つむ人のあとだになきハむかしにかハらず。
歸るさハ裏阪を下りて、

月輪寺

に立寄るへし。寺は鎌倉山と號し、是れ亦慶俊法師の開基にして、九條關白兼實公此に隱栖の後中興す。今ハいたく廢圮に委しぬれど、猶時雨の櫻の露しげく落て、親鸞上人手植のむかしを追懷し寺畔に涌出せる龍女水をくみては、俗腸を一洗するに足りぬべし。

山櫻あくまて色を見つる哉花ちるへくも風ふかぬ間に　兼盛

空也瀧

寺を出て丶十町斗りの谷間には、あり。高さ五丈洛中第一の大瀑にして、飛龍奔騰、萬山皆震ふ。餘沫雲烟となりて衣袖を襲ひ、全身忽ち粟を生す。斯る壯觀京味を人の多く知らざるは吾等里人の最も惜む處なり。

きのふけふ秋くるからにひくらしの聲打そふる瀧の白浪　玄旨

是より七八町を行けは、再び淸瀧の渡猿橋頭にかへる。元と來し路を戻りて、二尊院の前を東に行くこと二町斗りにして、北側の藪の中に、厭離庵と稱するものあり。卽ち

定家卿小倉山莊

にして、露霜のをくらの山に家ゐして、ほさても袖のくちぬへきかなと定家の歌ひ、住みそめし宿なかりせは小くら山いつくに老の身をかくさましと、爲家か和して代々隱栖し、かの小倉百首もこゝ

に選まれたる名跡にしあれと、年經るまゝにあれ行きて、今ハみすほらしき小庵を殘し、それさへも庇やれ軒かたふきて、あたりにすたく虫の音のみ、物のあはれをとゝむるそうたてき。定家卿の墓は庵の乾隅にあれとも、五輪の塔はいつしかこわれえて、唯、楓の老樹ひと本立てるる枝さして、むかしの秋を葉に染め出し。柳の水一名硯の水は、庵の東側に今なほ涌きもやまねと、あたりの塵あくたを掃ふ人たもなし。爲家卿の墓は此東半町、賤か男か畑打つ中にあり。あはれ世の敷島の道辿る人々よ、斯る名跡のすたれゆくをよそになすへきかは。

小楠公首塚

夫より三町東へ行き、南に折れて一町下れは、右手にあり。此地、寶篋院の舊境内に屬す。五輪塔二基、上なるを小楠公、下なるを足利二代將軍義詮の墓とす。むかしより土人の口碑には傳はれと、確知するによしなかりしか、近頃北垣國道、谷鐵臣の諸氏、寶篋院の遺物たる小楠公の古位牌と、吳溪和尚の古文書とを得て、其愈々正確なるを知り、乃ち藪林を開き地を押らし、一大紀念碑を建て、題して欽忠碑といふ。題字は北垣靜屋、碑文は谷如意の撰する處なり。蓋し義詮死に臨ミ遺言して曰、正行我に於ては仇敵たり、然れとも其忠勇誠に欽慕すへし。我死するの後、其墓側に葬れよと。即此言を取て題したるなり。嗚呼人の將さに死なむとするや、其言や善し。殊に欽忠の言、奸賊の肺腑より出つ、天理人心の百世に亘りて滅せさる、以て見るへし。且つ夫れ天に靈あり、斯る忠膽義魂を埋むるの地、空しく草叢に附するを容さむや。五百有餘歳

の後、人に命して之を修せしむ、寔に所以あるなり。我嵯峨の地たる、許多の名跡の外に、新田、楠の二大英靈を留む、土地の榮や大なり。如意山人歌ふて曰く、

「天龍寺畔暮烟合　大覺院邊殘照多　歷々二公埋首處
南朝正氣聚西峨」

五臺山清涼寺

所謂、嵯峨の釋迦堂是なり。此地、川原左大臣源融公の山莊、棲霞觀の遺蹟に屬す。本尊釋迦如來は即ち毘首羯摩作の赤栴檀瑞像にして絕世の靈佛たることは、喋々の辯を俟たす。一條天皇の永延年間奝然上人唐土より之を奉して歸り、更に勅許を得て、此に安置したるものなり。

SEIRYOJI (SHAKADO)　清涼寺釋迦堂

妙相自然三十二。豈容三天匠斧斤招一。試見未レ点レ地跟脚。果可三栴檀入二細彫一。　虎關

わしの山再ひかけのうつり來て
峨嵯野の露にあり明の月　寂蓮

今の本堂及山門等は、元祿年中の再建に係り、輪奐の美、結構の壯、洛西に冠たり。亦圖子は德川桂昌院の寄附せし處にして、彫刻の巧粉飾の麗、實に人目を眩す。

嵯峨源氏の祖たる、融大臣の墓は寺の境内にあり。近頃其苗裔相謀り、一碑を建てたり。奝然上人の

墓は、寺の艮位半町の處にあり。大念佛の開祖十萬上人の墓、並にかの梨園社會に嘖々たる遊女夕霧の墓は、院後の塋域内にあり。

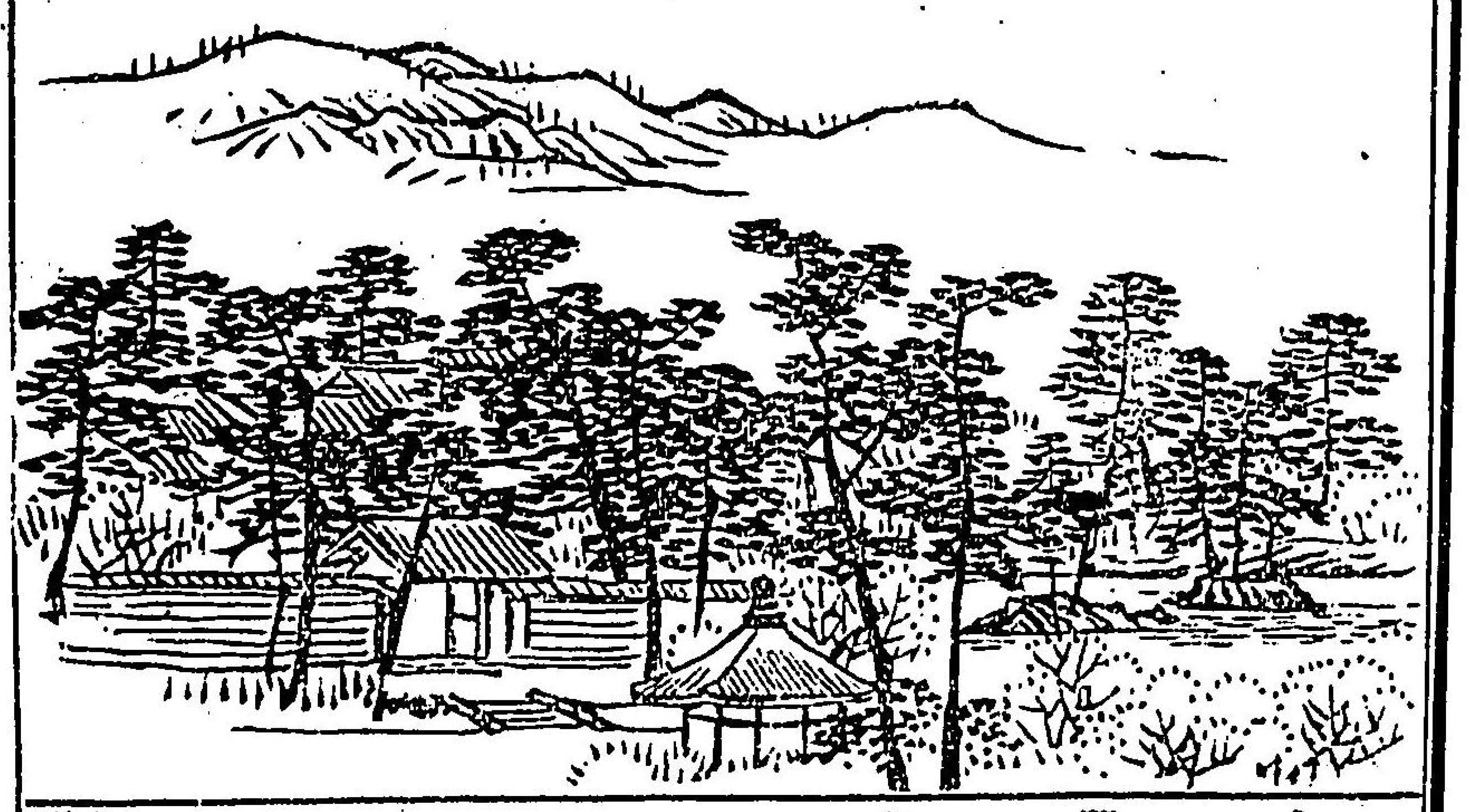
例年此寺に於て、執行する涅槃會（三月十五日）には、大松明三基を点し早中晩三稲の豐凶を卜し。大念佛（四月十日十三日十五日）には十萬上人の始めたる、所謂母見たやの念佛狂言を演し。御身拭（四月十九日）には釋尊の靈像を洗ひ奉りて、幾多の衆生に隨喜の涙を流さしむ。共に古來著名の法要にして、其都度禮拜者、數万を以て數ふ。

本堂の西隣に藥師寺あり。本尊藥師如來は、弘仁九年天下大疫の際、嵯峨天皇弘法大師に勅して、一刀三禮を以て、刻ましめ給ひし靈佛にして、心經秘鍵の藥師といふ。

清涼寺山門前の街道を、東に行くこと五六町、北に折れて更に二三町進めは、

大覺寺門跡

ま到る。是れ即嵯峨天皇の離宮、弘法大師練行の舊地にして舊と嵯峨御所と稱す。貞觀年間、淳和院太后の令旨により、離宮を更めて精舍となし、淳和天皇第二の皇子、恒寂法親王を以て開祖となす。後、二百八十餘年を經て、文永五年後嵯峨院、龜山院相次て當寺に御在住。何れも皇宗の聖跡を慕はせ給ふなり。弘安十年後宇多法



DAIKAKUJI 大覺寺

皇入御、伽藍僧坊を新營し、大に御中興の功を擧け給ふ。先ㇾ是文保二年後醍醐天皇御卽位の首め、鎌倉武將の奏請により、法皇當寺に於て、萬機を親斷し給ふこと四年。其御落飾の後たりしを以て、常に玉冠を御座の上に掛けさせ給ふ、故に大覺寺の正寢を今尙御冠の間と稱す。此時に方て大覺寺は、實に天下法流の淵源たるのみならず、萬機政令の樞府たりしなり。而して此際嵯峨の最も隆盛なる時代たりしことも、亦以て想像すへきなり。

明德三年南北朝の御講和に際し、後龜山天皇三神器を奉して、芳野の行宮より當寺に入御、御父子の禮を以て、神器を北朝後小松天皇に授け給ひ、茲に御講和成る。後龜山天皇御製あり、

　とすれむと思ふかひなくふる事を又いひ出てゝしほる袖かな

嗚呼當時の御境遇を回想し奉れは、誰か卷を覆ふて悵然之を久ふせさるものあるへき。爾來大覺寺は代々、法親王の御住院となり、以て光格天皇の御養子、慈性法親王に至れり。是等赫々たる事歴は舊寺領上嵯峨一圓の守護司不入の特權となり、儼として一區の王府を樹立したりしなり。殿舍の現存せるもの、往古の十分一にも及はすと雖も、猶結構の壯大、裝飾の優麗、洛中多く其比を見す。

例月廿日廿一日の兩日は唐門を開き御影堂に諸人の參拜を許す殊に八月二十日の法會は、大覺寺の二十日大師又は宵弘法とて、近郡村よりまうづるもの甚た多し。この夜の踊ハ、所謂北嵯峨のをどりともいふへくして、今そつゝら帽子をシャンときるてふ事もなく、四五人に月落ちかゝるてふまでは、そづまねど、亦ひとつの見ものなるへし。

其東に接して池ある、

大澤池

一名庭湖と稱す。嵯峨天皇離宮の御庭潭にして、大覺寺の現境内に屬す。むかしの御舟遊は其跡を絶つと雖も、春陽三月櫻雲塘上を壓しさながら九重の天邊を歩む心地す。池中に二島あり、天神島並に菊が島と稱す。紀友則卿が、一本とおもひし菊を大澤の池のそこにも誰かうゑけむとよみしも、此處なめり。殊に後水尾天皇、常に此池の風致をめでさせ給ひ、屢々行幸あり、木々の色のうつろふ池に浮鴨やしくれも知らぬ青葉なるらむとよませ給ふ、巨勢金岡が建てたりし庭湖石は、今猶碧潭に出沒し。名古曾の瀧は公任卿がたえて久しと、いひけむ程なれば、今見ゆる筈はなけれど、猶其跡は尋ぬべく。北に連る山嶽を仰げば、左に嵯峨天皇の嵯峨山上陵あり。右に後宇多天皇の蓮華峰寺陵あり池畔に立てる一碑には、近衛家の老女、津崎村岡の功勳を叙せり。何れか斷腸の料ならざるべき。池の乾隅に在りて離宮の鎭守たる、五社の宮を拜し。更に北の方五六町の山間、細谷と稱する處には、

直指庵

といふあり。黃檗宗淵源の地にして、隱元禪師入朝の時、長崎より先つ此地に着き、此に鐵杖を止め、後、宇治に地を相して、黃檗山を開きしなり。獨照、月潭の高德も相繼て、此庵に住みければ、梵鐘長く溪聲に和し、法燈靜に空山を照らせしも、年ふるまゝに荒廢に委せしが、津崎村岡此に餘生を樂むにて、漸く再興の功を擧けぬ。然るに明治の初年、祝融氏の襲ふ所となり、今は僅に開山堂を殘し、

松風蘿月時に訪へとも、木像默して答へす。嗚呼、此靈源聖跡、草莽に委して顧みざるの道俗、其れ古人に愧るなきか。

村岡は大覺寺宮臣、津崎筑後介の女なり。近衛家三代ゟ歴仕し、晩年國歩多難の秋に際會し、孱弱の身を以て天下の俊傑と交り、命を王事に委ね、遂に幕府の忌憚に觸れ、賴三樹等と共に、江戸に檻送せられしゝ、七旬の女齡を以て、滔々幕吏を罵倒し、非理の刑戮を脱して鄕里に歸り、

雨あられはけしくふれと軒ふかき吾家はもれと聞えさりけり

と嘯き去りしは卽此處なり。

廣澤の池

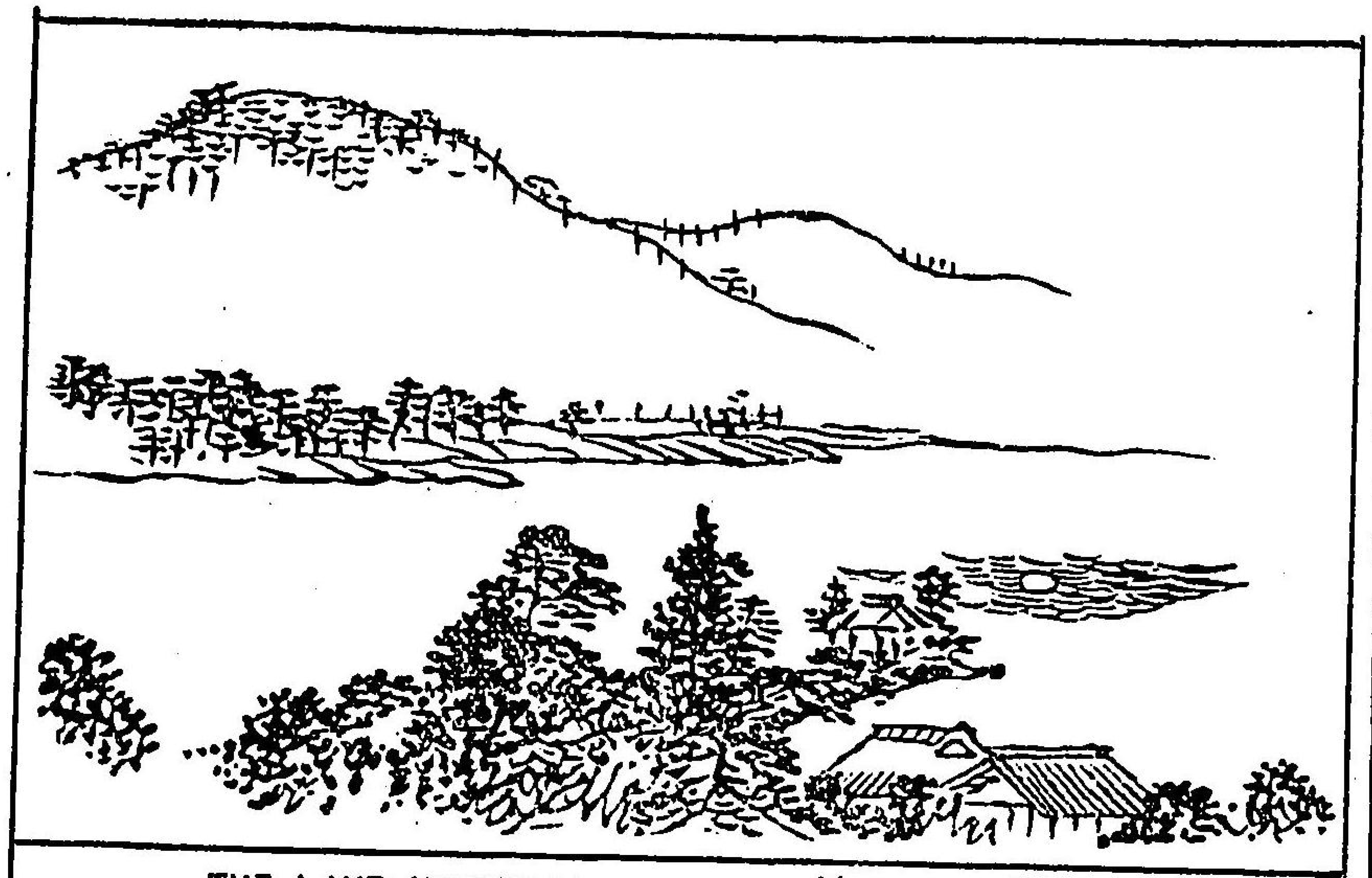
是より高雄街道を辿りて、東に進みゟ出づ。方四町もありて、洛西第一の大池なり。此池は宇多天皇の皇孫、寛朝大僧正が、穿築せられける所にして、九百有餘年を經たり。寛朝實に此地に於て、眞言宗の一大派、廣澤御流なるものを開く。されは後宇多法皇は、

心さし深くくみてし廣澤の
流はすゑもたえしとそおもふ

と御製遊されは、後鳥羽院は

廣さはの池にやとれる月影や
むかしをかへす鏡なるらむ

とよませ給ふ。又古來觀月の勝地



THE LAKE HIROSAWA　廣澤池

たることは、古人の吟咏數ふへからさるにても知らる。

更科も明石もこゝにさそひ來て月の光はひろ澤の池　慈鎮

隈もなく月すむ夜半は廣澤の池は空にそひとつ也ける　經家

野べながら月の都と見えにけり浪の玉しく廣澤の池　契沖

はせをハ池をめぐりて、夜もすから月ようかれ蒼虬ハ鳰一つ相手に、池の月見に餘念なし。三位中將維盛の子、六代丸も此あたりに隱れ、望月長孝は池の艮隅にわび住みて「明れはひろふ軒のさゝ栗」と嘯く遍照寺は今其所を換ゆれど、おなし名の山は長へに池心に映し、兒の森、晝暗うして蟬の聲のみぞしぐるゝ。或人のいふ嵯峨、の雅趣は廣澤に在りと、蓋し吾意を得たり。

千代の古道、小流石など、皆池の東に在り。又此街道は鳴瀧、御室、妙心寺、北野、金閣寺等へ通す。

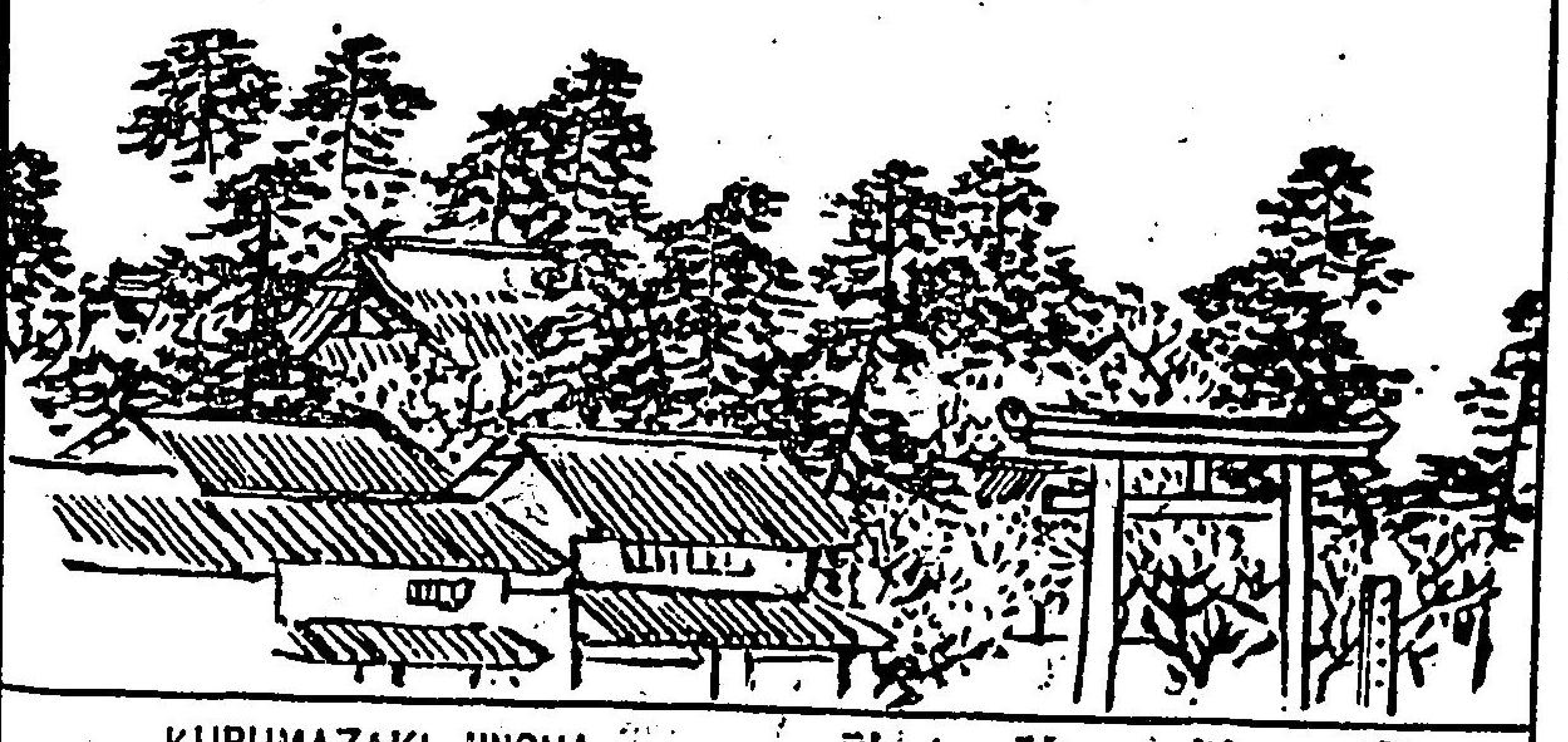
廣澤の西南一帶の平野を、所謂

嵯峨野

と總稱するものにして、古來春秋の景物に富み、百敷の大宮人が、小松ひき若菜つみ、あるハ虫撰みなど、さま〴〵の遊ひありし名所なり。僧正遍照は女郎花よみとれて馬より落ち、西行は御狩の跡をたつねて、野山も里もあせかはりけりと嘆く。さはれ、うら〳〵と霞み渡れる春の日に、若草のみどりのむしろふみしだき、あるは茅花ぬき、蕨手をりなどして、雲雀のあざけり戯、空耳にするもをかしく、秋風に露ちる八千草をわけては、花すり衣きてかへるも、亦一段の興なるべし。かくて野を南に横ぎりて、

車折神社

に詣づへし。こゝには清原頼業公を奉祀す。嘗て靈顯あり、後嵯峨天皇勅して、車折明神の號を賜ふ。頼業は舍人親王の後胤、天資聰明にして、聖賢の道に明けし。嘗て禮記中の大學中庸の二篇を觀て、是れ必す聖人の一大學脉の書なるへきを唱ふ。此時未た二程の説本朝に聞えす、朱子の章句の如き、公の晩年に當れり。其卓識此の如し、宜なる哉、四朝に歴仕し、以て　至尊を啓沃し奉るの功を全ふせしや。社前櫻楓の老樹枝を交え、春秋の景趣頗る多し。



KURUMAZAKI JINSHA　車折神社

是より西に戻りて、汽車に投し京に歸る歟、あるは東して太祇が所謂、すみけりな五器洗ふ水の有栖川を越て、帷子の辻に出で、やがて太秦廣隆寺の古刹を訪はむか、そは遊はむ人に任してむ。終に臨むで、

嵯峨の名産

とも稱すへきものゝ、あらましをしるさむとす。

野に山に木の芽草のめ春雨の、晴れゆくあとのさゝ濁りには、大堰川あるは清瀧川のほとりに糸たれて、若鮎つるも可し、人の捕らへしを購ひて喰ふは更に可。秋の落鮎の風味は、頼山陽が所謂、

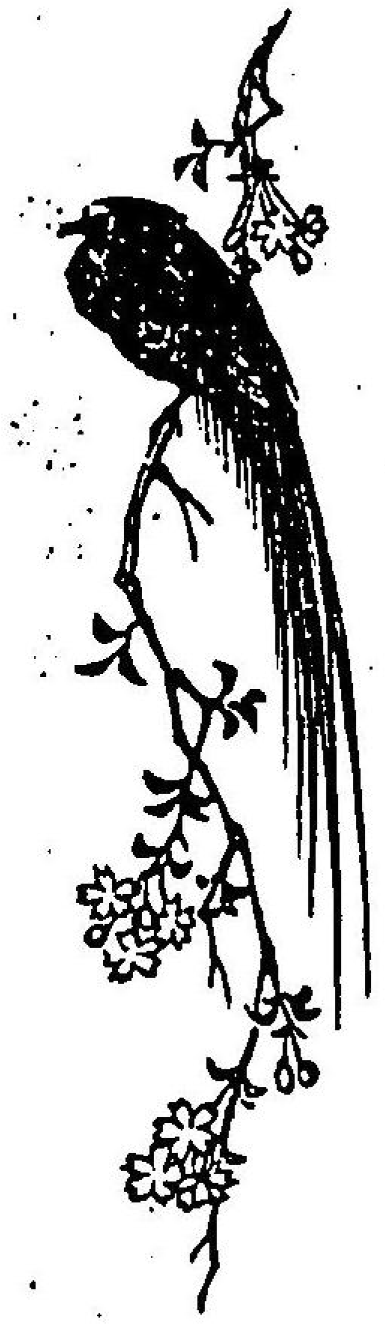
噞喁上串泣玉液、一齧切下醬嚼蘭肪、

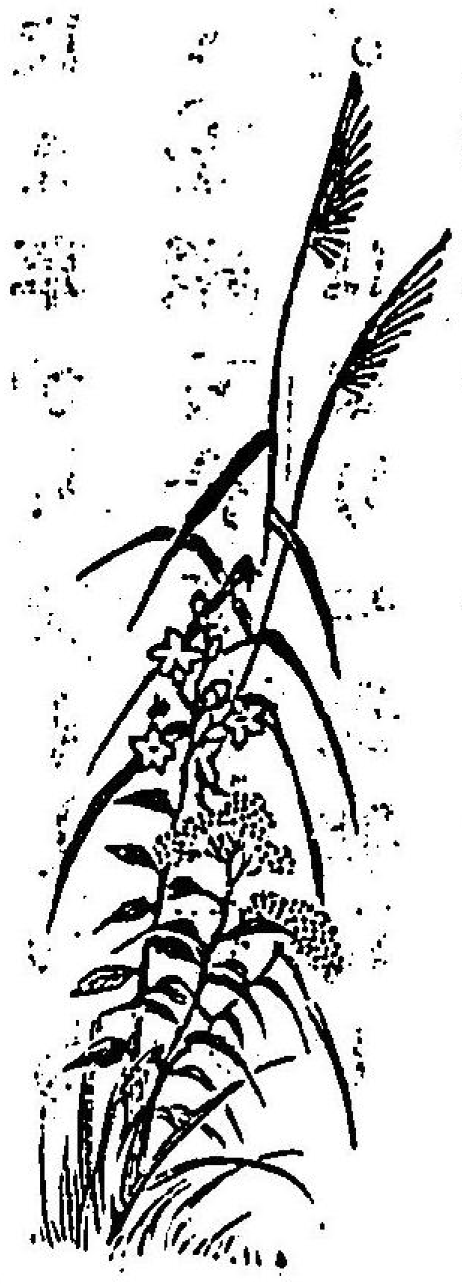
にして、他處にたぐひやなからむ。殊に清瀧川のものは喰ふの前、先づ顋を括ること肝要なるへし。竹の子は孟宗こそ樫原あたりのにはすぐれね、眞竹ハ嵯峨の特産にして、五月雨のはれ間に掘りいつへく。秋ふかみ紅葉ふみわけ、なく鹿の聲きく頃には、龜山、小倉山、廣澤のうしろのあたり、さては大覺寺の北の山々に蕈狩するはこよなき興なりけり。茸の香味も東山あたりのゝゝ及ふへきに非す。其角か、鼻の先なる歌かるたとは、秋の嵯峨山に遊ひてこそ思ひいづれ。

菓物は嵯峨の奧なる、水尾より多く出でゝゝ枇杷石榴なと、わきて風味よし。柿、栗も近き山邊に夥しく二尊院のうしろ、一位二位の雲上人の墓のあたりに、落椎をひろひても、四位をかこちし頼政を忍ひつへし。

愛宕あたりより出る、所謂本山の砥石、硯も限りなき脉を辿りて掘り出さる。又近き頃野の宮の土器のふる事にちなみて、嵐山燒てふ陶器ぞ、作りいださる。かく云ふ著者も、其作り主の一人にしあれは、品柄のよしあしも自らいハず、釋迦堂前の三樂舍、あるも渡月橋頭の渡月亭なとを、訪ふて見よかし。

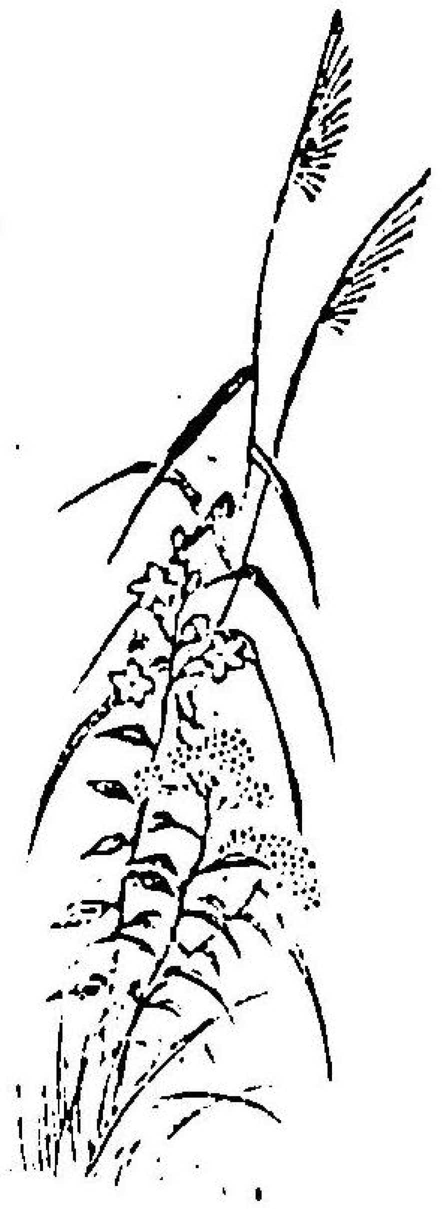
以上記述する所は、我か里の名所舊跡のあらましに過きす。委しき事を知らむとならも、おのれか別に物したる都のいぬゐてふ書を繙けよ。是には嵯峨のミならて、松尾、太秦、御室さてハ高雄、栂尾のあたりまて、一々名所舊蹟の由緒沿革あるは古今の吟咏をしるせり。





おのれ嵯峨にすみ常よ名所舊跡の間をさまよひありきあるそ山に妻木こり野にま草かりなとしつるまに〳〵うなり出てたるまゝを綴り合せて嵯峨の名ところてふ一つらのえせ歌とはなりぬ長歌にもあらす今様にもあらすさてそ新体詩とやらむよもあらす何とも名つけむやうもなきものにしあれと野からすのさわきあるそ山猿の嘯きにはもとよりたへなるしらへのあるへきにあらねそ看む人深くなとがめ給ひそ

作者桂陰しるす



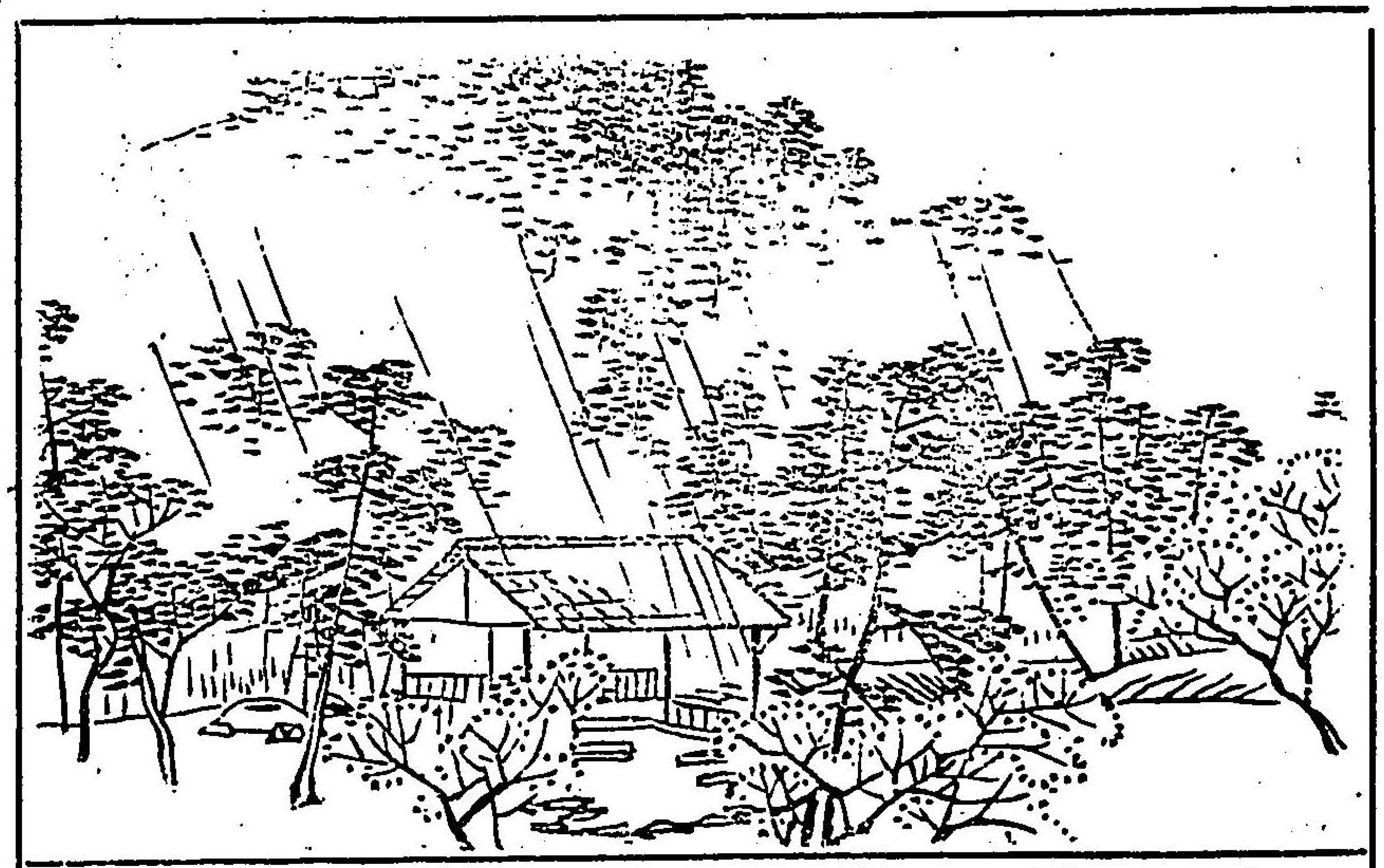
嵯峨の名どころ

ふるきむかしに
たつぬれど
嵯峨と名つけし
むかしより
峰のもみぢの
たえ間なき
ちかき村里
なかりけれ
常寂光寺の
ゆふがらす

立かへり
さだかならぬは
はじめなり
世よ名高きは
いろをそでゝ
時雨のいほよ
みやこまで
とはにさびしき
かねの音に
柿の實落る

書のそやしを
わがさとを
されどもの里
小ぐらやま
とひ來る人も
やすらへは
見えぬくまこそ
山かげの
ねぐらあらそふ
菴ふりて

梢そちかき
あらしやま
北にとなれる
二尊院
彌陀釋迦ならひ
立たまひ
圓光だいし
あしびきの
御影はこゝに
つたはれり
寺のうしろよ
立ならふ



時雨亭　SHIGURENO CHIN

石ふみミれば
百しきハ
大みや人や
ひじりなと
葬りたりし
跡なれや
樹々のしげみに
なくとりの
聲もあハれに
きこゆなる
からくれなゐの
舞のそで

浮世とゝもに
ふりすてし
祇王や妓女の
かくれ家は
今なきあとに
をみなへし
露もおもげに
しをれけり
風にみだるゝ
はたすゝき
まけつゝ行けは
君のため

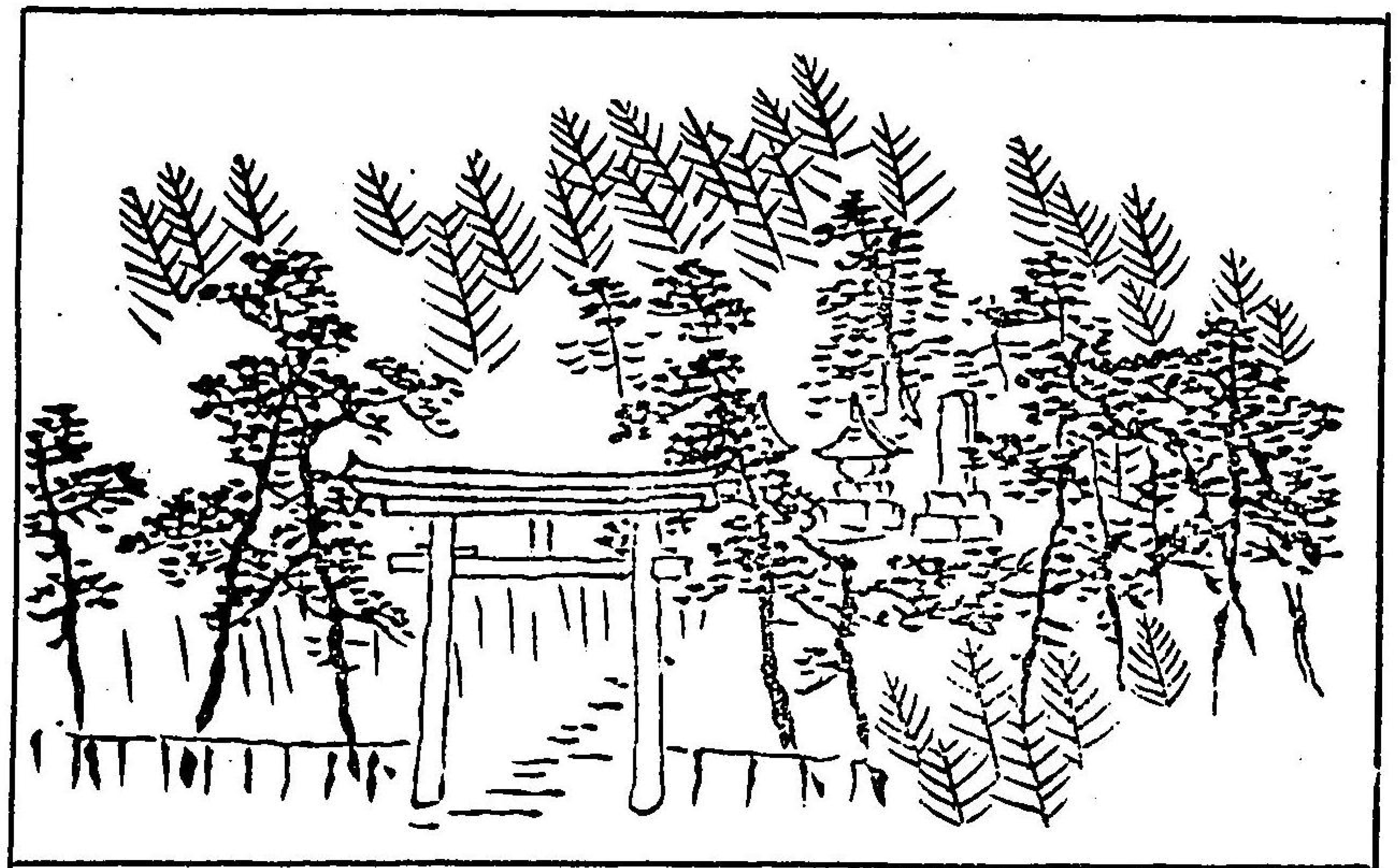
化野念佛寺　ADASHINO NENBUTSUJI

立てしいさをも
かくれなき
新田の公の
塚のうへに
石ふみさへぞ
立らるゝ
いづれ吾らは
あだし野ハ
露ときゆべき
身なれども
なほ百とせも
こゝろみの

坂をこゆれは　いときよき　清瀧川の
きよき瀬は　苔むす岩に　くだけつゝ
川鹿の聲も　すが〱し　こゝまかけたる
橋の名の　猿をたり　わたりゆけは
いとゞけはしき　つゞら折を　杉の木立を
ふくあらし　熊笹をくる　風のおと
たけきけものや　いでぬらむ　をろちも今や
おそひ來む　山いや高く　かけまくも
かしこき神は　伊佐那美の　尊とゝもに
かぎろひの　火伏の神も　いつくなる
愛宕の山の　又の名ハ　あさひの峰と
たゝへけり　白雲寺は　しらくもの

たえ間に匂ふ　しきみが原　妻こひわひて
なく鹿を　誰れかあハれと　おもふらむ
山のふもとの　若みとり　陰のしげみえ
夏は日乃　あつさもしらぬ　空也瀧
日ぐらしの瀧に　ひハくれて　家路をいそぐ
かり人の　すきこし方に　ましらなく
月の輪でらは　そのむかし　法のひじりの
植ゑおきし　おそさくら花　さきみちて
空ましられぬ　むらしぐれ　しげくもふれは
さと人は　しぐれ櫻と　なづけけり
その名は世にも　しき志まの　道もふりゆく
露しも乃　をくらの里の　をひすまひ

定家の君の
おくつきに
ちりしく紅葉
あはれなる
世にかぐはしき
かひらへの
木もてきざめる
釋迦牟尼の
尊き御影そ
わしのやま
法のうてなの
いや高き



MONUMENT OF KUSUNOKI MASATSURA 小楠公塚

清凉寺にぞ
つたはれる
みてらに近き
たかむらの
いろは八千代も
かはりなき
操は今も
かをりぬる
楠のわか君
正行の
おくつきふりて
苔むせる

石のしるしに
なけゝとて
かこち川まも
なつかしき
嵯峨のみかどの
すめみ子の
住ませ給ひし
大とのの
なほいかめしき
照りそふる
梅たち花ぞ
しらさぎの

おく露は
月夜はものを
かけ渡す
西行法師の
このかたに
御法のちかひ
大覺寺
今はいたくも
みいらかに
御階のもとの
にほひける
小魚をあさる

なみたなりける
おもはする
歌づめ橋は
あとゝふや
いともかしこき
めでたくも
千歳もふるき
あれたれど
天津日かげぞ
右ひだり
いつの世よりか
おほ澤乃

池のつゝみの
庭なりし
おもひつけて
ひめもすに
たとりくらしつ
五社の宮
むかしなからに
きこえねと
千代のふる道
みやひとの
ひとりたえせぬ
すむ月は

さくら花
さまこそみゆれ
菅のねの
天神じまや
ほのぐらき
むぐらふみわけ
打たえて
名こそ流れて
あとふりて
かげハ今こそ
廣さはの
遍くよをは

むかし雲井の
そのさまを
長き春日も
きくが島
杜の木立ハ
野路ゆけは
瀧のひゞきは
ゆかしけれ
小松ひくてふ
たえにけれ
法のながれに
照らはなて

月ようかれて
こゑもして
ひるもをぐらき
蝉しぐれ
道のかたへの
小しばがき
天龍禅寺の
うつる月
幾千代ふるき
をりとひて
嵐の山を
はた楓

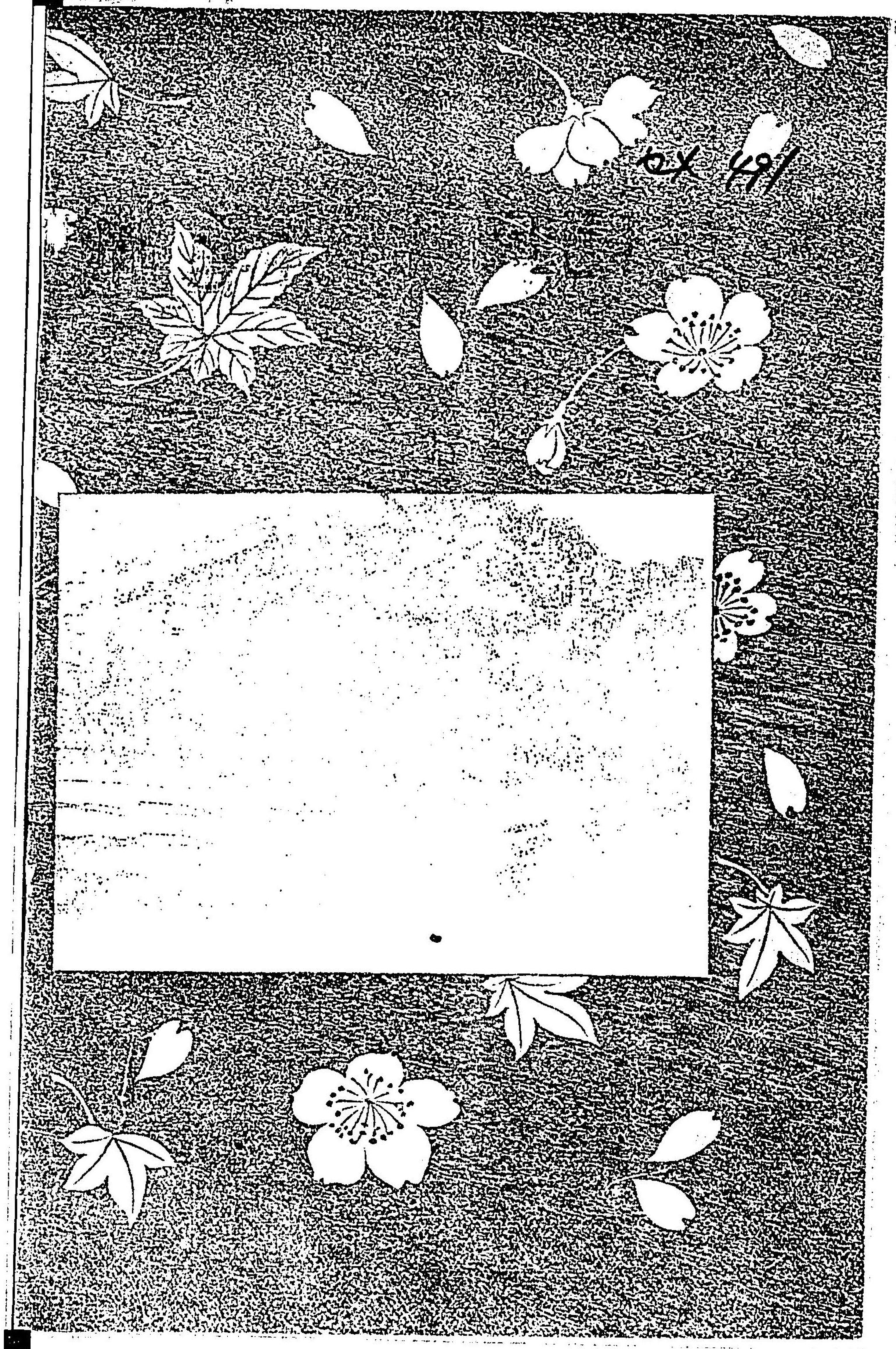
夜もすから
山は嵯峨野の
ちごの森
小倉の山乃
野々宮え
黒木のとりゐ
松のかぜ
なへてさとりの
亀の尾の
大堰の川を
みわたせは
まじりしげりて

蘆間に雁の
富士なれや
梢落來る
ふもとなる
いと神さひし
まけむせり
庭のいつみに
しをりゐな
山のさゝらひ
へだてつゝ
松にさくらに
をりくの

なかめのいとゞたへなるは戸無瀬の瀧の
しらいとをくりかへしてもつきせじな
月のみふねも渡るてふ橋をくゞりて
こぎ行けば川風寒ふみ千とりなく
千鳥が淵もとくすぎて立てるいし文
打みれば翁が残せし言の葉の
世にも匂へる花のやま二町登れゑ
大悲閣みてらのむかししのび音に
木かげになのるほとゝきす谷間にもゆる
岩つゝじ清き流をあやをりぬ
矢よりも早き瀬をせばみ苔むす岩の
かずくはよろにたぐひもあらし山

松のしらべは今もなほ琴にまがひて
法の輪の寺の軒ばにかよふなる
通ひもやまぬ小ぐるまのゆくてあふけは
清はらの神のめぐみもありす川
みろぎの跡はわかねどもいつきの宮乃
しらゆふまのかよへる風のすゝしさを
袂にしめてかたびらの辻を行かふ
人しげしかくさまぐの名どころも
浮世のさがのさだゑなくうつりかはれど
むか志より言乃葉草乃根をふかみ
幾萬代もくちせじな

春は花あきも
紅葉のなところを
うき世のさかと
誰れかいひけむ


ex 491

INTRODUCTION.

IN a quiet nook nort-west of the city of Kyoto, there is a famous village named Saga Its scenery and historical values are certainly matchless in the neighborhood of the city. Though its landscape is well known even to foreigners its being the seat of Arashiyama, yet the histories, architectures, fine arts, etc, are not so much known to people. Living in this village and having convinience to introduce these famous places and ancient remains for foreign visitors, I have trid to make a little service for them.

Ofcourse the following articles are only the short sketches accompaning the several pictures which were kindly drawn by Mr Gesshu, a painter. If this little book may be used as a guide, the visitors are likely to be able to go round interesting places of this division as conveniently as is expected with a living conductor.

Y. Kobayashi.

ARASHIYAMA. To write or speak fully of such an incompatible scenery as Arashiyama is certainly out of my task. With its cherrys, maples, and pine trees, the mountain is never wanting of its own beauty through all seasons. But in the springtime, cherry blossoms are unspeakably splendid, and thousands of people are attracted from everywhere by the charms of the season. These cherry trees were transplanted from Yoshinoyama, a famous mountain in the province of Yamato, by the order of the Emperor Kameyama (1260-1276).

Tonasenotaki, a waterfall; Daihikaku, a temple with delightful view; Hōrinji, a temple with a famous image of Kokujōbosatsu; the tombstone of Kogō, a court lady who retired here from a matter of love,—these are the most famous spots or remains belonging to this hill.

THE RIVERHŌZU. Upper currents or rather rappid of the river Ohoi is called Hozugawa (from the village Hozu to Arashiyama is about 7 or 8 miles distant, but to descent to Arashiyama we take only 2 hours.) It is now passable only by boats of peculiar construction guided by the moss skillful boatmen:

"THE CURRENT IS AS AN ARROW,
SO THE BOAT-POLE MAKES A BOW"

Dushing against several rocks or projecting banks, the

rapids crushes here and there making a thunder roar, so that descending by the boat, we pleasantly but awfully feel just as constant earthquake. such rocks, precipices, and whirlpools have several names, chastefully given by owr ancient and modern poets. It is not an abusive language to say

"River Hōzu is a grandeur of the Globe."

This river was made navigable by Suminokura Ryoi, about 300 years ago, under the permission of Ieyasu, the first of Tokugawa Shoguns. Other large rivers such as Ōi, Tenryu, Fuji etc, were similarilly made usable by him. At that time our countly had not still so much machines or tools as now—socalled sivilized age. And he hasaaccomplished such elegant works with almost only the hands and legs governd by his heroic brain.

He is an offspring of Sasaki-family of Ōmi. After such favorable accomplishment he has been plomoted to Hatamoto or a hereditary vassal of Shogunate, and afterwards he and his descendants lived in this village.

The appending picture is only the general view of Hōzugawa and Arashiyama.

TENRYUJI is one of the five principal temples belonging to the Rinzai branch of the Zen sect. It was built by Ashikaga Takauji 1286 under the order of the Emperor

Kōgon-in to the memory of the Emperor Godaigo. Its first abbot is Musōkokushi, a famous priest with his deep learnings. Through the war-fires of several times, its main buildings have successively been burned down and devastated, but of present the re-erection of them is under consideration of the men of the faith.

The garden of this temple, with a pond at the center, wonderfully tastefull, was designed by Musōkokushi, and one would never disappoint in visiting it in any season.

In the yard of this temple, you would see the tomb-stones and seperchres of the several Emperors, both of the northern and southern dynasties. If you know somthing on history of this country, you would see why they strike our home visitors with a sensation of Loyalty and Patriotism!

JOJAKKOJI is in the mountain range of Ogura, near the temple Nison-in. Belonging to the Hokke Sect, this temple was founded by the bishop Nisshin, after he designated the office of abbot of Honkokuji in Kyoto.

It is so secluded a quarter that nothing but the singing of a bird or the rustling of a deer breaks the qnietness of this place. Hence, even befor the establishment of the temple, this spot would have been frequented by poets.

Kasenshi or the shrine of poet-sage stands in the slope

behind this temple, and Fujiwarano-Teika is commemorated there in.

NISON-IN situated at the foot of the mount Ogura (⅓ mile west of Shakadō) is an old temple built under the order of the Emperor Saga. The tytle Nison-in means "Two-image temple" because its main images are Shaka and Amida, both being carved by Kasuga, an excellent sculptor

In the process of time, this temple had fallen into ruin; and the present temple was re-erected by Bishop Hōnen and his follower Tankū, under the pious help of Fujiwarano-Kanezane, the prime minister of that time (1200).

Socalled "Foot dragging portrait of the Bishop Hōnen" painted by Takuma-Hōgen, is the most celebrated treasure of this temple.

On the front arena of this temple, and also on the top of the hill Ogurayama, there are many maple trees whose crimson leaves in the autumnal season, attract the visitors from everywhere. Hence we meet with the familiar name of Ogurayama in the old poems or verses. Shigureno-Chin or "Drizzlng-shower Cottage" stands in the sidehill of Ogurayama. It is note, for the famous poet Fujiwarano-Teika used to spend his leisure times in it.

On the cemetery belonging to this temple many noble fa-

milies, such as Nijō, Takatsukasa, Sanjō, etc, have their graves, and many renowned men such as Itō Jinsai, Tōgai, Suminokura Ryoi, etc are also buried here.

ATAGOYAMA, north-west of the city, is the highest mountain in the Kyoto Prefectur. By jinrikisha we may reach to what is called Ichinotorii or the first portal, from where to the summit is a distance of about 3 ½mile. Climbing up and down the first hill called Kokoromijaka or Test Hill, we come across a village named Kiyotaki (clear rapids; situated on the both banks of a stream having the same name. It is a very suitable place to avoid summer heat.

Remaining distance to the summit is 2 ½miles which is almost a cliffy road. On the summit, where the crymptomeria trees are growing all over, there is a shrine of several Gods such as Izanamino mikoto, Honomusubino-Kami or the God of Fire, etc. This holy place had been laid out by En-no-Gyoja, an enthusiastic priest (700), and afterward the abbot Keishun (781) erected the present building under the order of the Emperor Konin. Under the genial influence of the God of Fire, it is said, pilgrims may be accessible to this shrine even in the dead winter, when the steep roads are all covered with snow

On return, visitors may wisely take another road which, though a little less short, leads by the old temple Tsukino-

wa, the Shigureno-Sakura, a famous cherry tree whose blossoms are excellenlly beautiful, and the Kūyadaki, one of the largest waterfall in the vicinity of Kyoto. Passing along these places, we reach again to the village of Kiyotaki.

SEIRYOJI OR SHAKADO (½mile from Arashiyama) stands in the ground where the retirement of Minamotonoboru, a Loyal Prince of the Emperor Saga, is said to have teen situated. The present buildings were re-ercted in 1702 (Genroku era), and they are the greatest and most tasteful buil dings in the western environs of the city.

The main object of worship is an image of Shaka 5 feet high. It is said that this imaga had been made of a red-sandal wood by Bishukatsuma, an enthusiastic sculptor of India, during the life time of Budda. It was brought from China by the bishop Chōnen 1100, who voaged to the continent, with a religious objeet, and situatied in this temple under the permission of the Emperor Ichijō. Consequently, it is worshiped by all classes of our people, and pilgrims frequent from all parts of the country.

Nehan-e, a memorial seremony of the death of Buddha (15th of March); Dainenbutsu Kyogen, a kind of drama, held for the religious purposes(10th-15th of April); Omino-gui or the wiping of the image (19th of April);—these are the most celebrated seremonies yearly conducted in this temple.

DAIKAKUJI (⅔mile from Ara.) is the remain of the retired palace of the Emperor Saga, and it was called Saga-Gosho or the Palace of Saga It was transformed into a temple by the order of the Empress Junna, and it was given to Gojaku, the second Loyal Prince of the Emperor Junna. Since then, Imperial princes had held the office of abbot belonging to the Shingon Sect. And the Emperors Gosaga, Kameyama, Gouda, and Gokameyama, respectively made it their residnece. Especially, by Gouda 1300 this temple was so perfectly repaired that he was called the Restorator of Daikakuji. And from a certain state of things he had attended to the affairs of state forfour years in this temple, and, in this account, the Okanmurinoma or "the room of Imperial Crown" is still respecfully kept.

When peace was declared between the Northern and Southern Dynasties in 1392, the Emperor Gokameyama brought here with him the three Imperial Treasures which he gave over to Gokomatsu of the Northern Line.

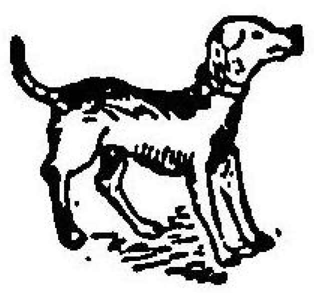
At present both the erea of ground and the number of buildings of this temple are said to have been reduced to less than one tenth as compared with those of the old time, yet remaining architectures with their elegance, and several mansions with their graceful ornaments are still the pride of our village.

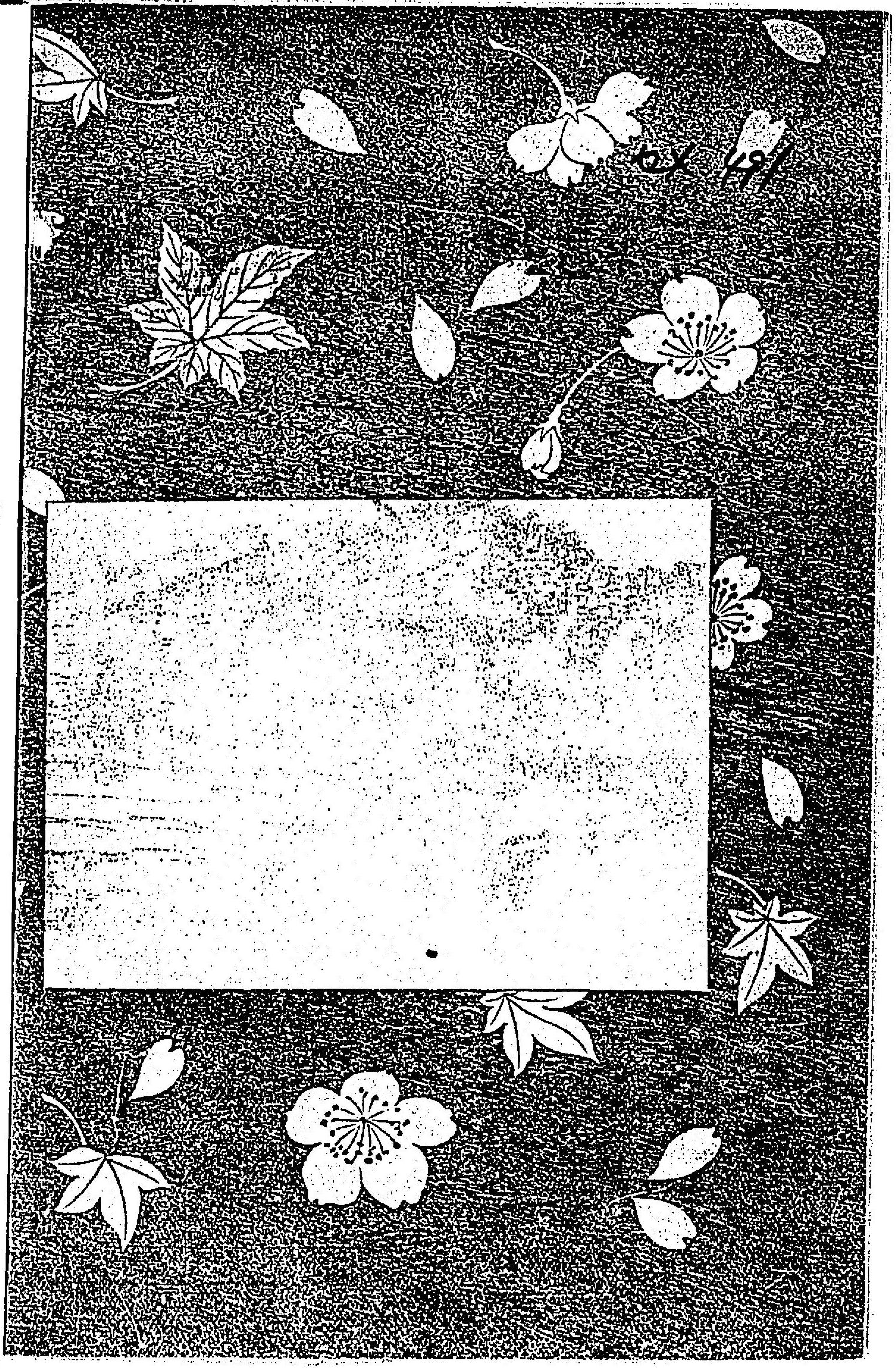
The Lake Osawa at the eastern side of Daikakuji was the

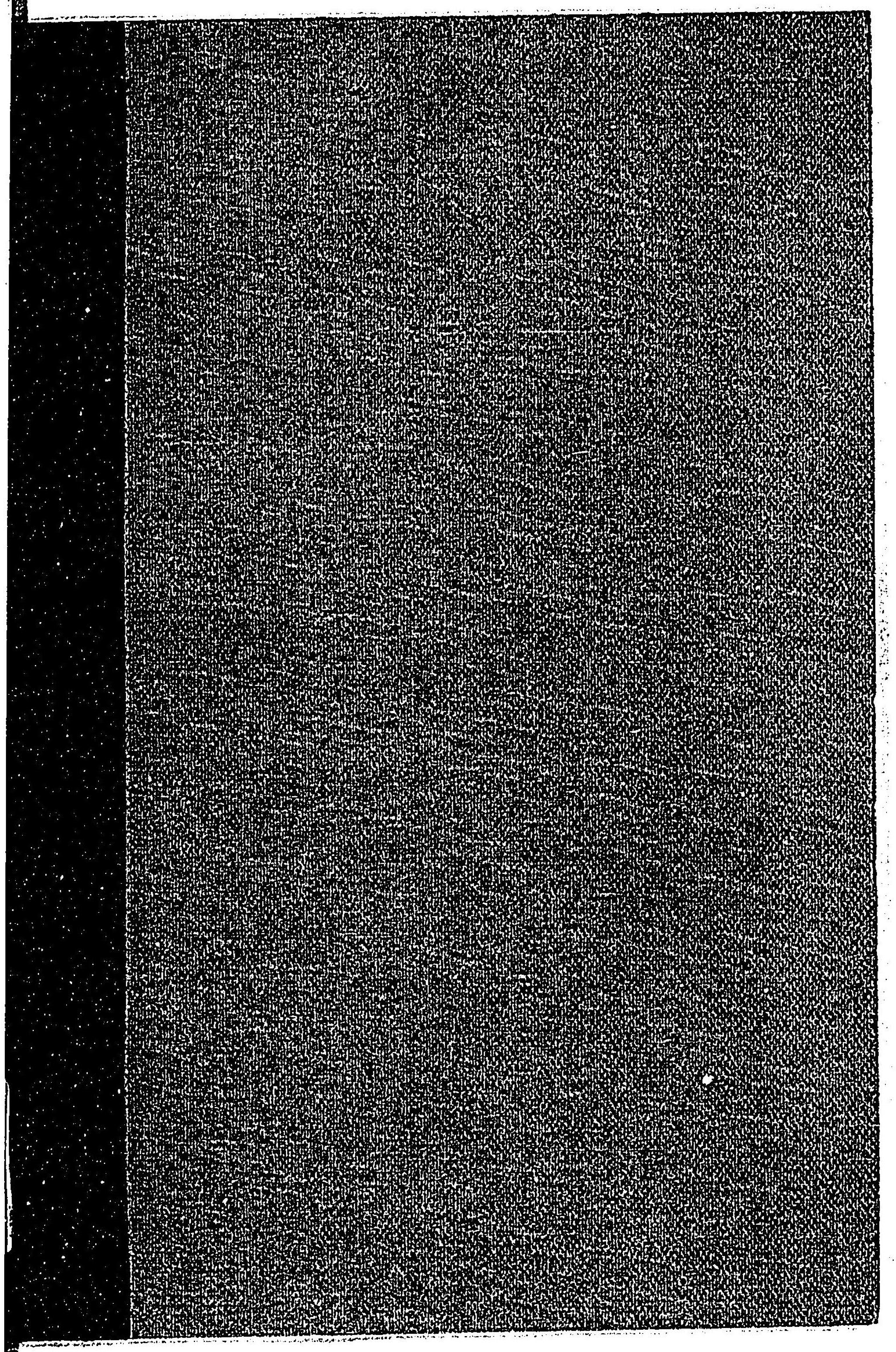
garden pond belonging to the summer palace of the Emperor Saga. Along the banks of the lake, there are many cherry trees, which bloom in splendor and attract visitors in the spring Two islands, Kikuno-shima and Tenjin-jima, seem to add somthing to the fine views of the lake.

THE LAKE HIROSAWA (½mile east of Shakado), is the most famous place for enjoying the bright moon. Its circumference is about 4 miles, and its banks are planted with cherrys, maples and willows. In an clear evening of autumn, the moon rising up in full brightness, sheds its light upon the crests of little waves, thus giving rise to an appearance of the silverly gems, plattered all over the lake. At the same time the inverted shadow of the hill Henshōjiyama, rest on the lake's heart. Several water-fowls are also seen quietly floating, as if careful not to break the surface of such a highly decorated element. These scenerys or views are of the subjects of ancient as well as modern poems of this country.

This lake was artificially dug out by the direction of the abbot Kwanchō, about 900 years ago. Kwancho, a grandson of the Emperor Uda, is the founder of Hirosawaryu, a branch of Shingon Sect.







025449-000-6

特29-480

嵯峨名勝案内図会

小林　吉明／著

M30

ADC-2901